國禁を犯したる大罪人でも、謂ば國事犯剩して勤王の志士忠勇義烈であるのと、當代を風靡した水戸齊昭侯の家臣でもあり、他日戸田藩でも勤王黨として活躍したくらゐであるから、ソウ粗末に取扱も出來ぬ譯である。旁々相應の待遇を窃にして膳部も美酒佳肴を取揃て侑ると、浪士は更に喜ばず却て接待係りに向て

「當家は番所を守る役柄ではないか、吾々の通過するのも咎むる氣力もなく、却て御馳走をするとは何事、國禁を犯したる罪人に對する仕打は責任感念を思はざるものと見られる、コノ腰拔け侍、不潔の待遇は絶對に受けぬ」

と云ふが早いか前に出ている膳を足で蹴飛して了つた、接待の一同はその亂暴狼藉に憤慨たけれどもこの場合如何ともする能すであつた。すると接待係の一人がこの接待は藩中第一の奇傑田崎梅溪に賴む外はないと云ひ出ると、一同はそれはいゝところえ氣が付たと直に賛成され、そこで藩公へ其旨を伺に出ると早速御裁可で、トウ〳〵厄介の大役は先生のところへお鉢が廻つたのである。

其翌日から先生は接待係長で、客の前へ出ると浪士が暫らく凝視して

「貴公は豫て聞て居る田崎梅溪君ではないかと問ふ」

先生も

「私が田崎です、今後昵懇に願ひたい」

と答える、それから四方山の話しなどして一見舊知のやうに肝膽相照して、傍人の不思議さうにして居るも無理のないことで、聖人は聖人を知り、豪傑は豪傑を知るのである。この頃先生は喧嘩梅溪で通て居る位で、その氣魄は水戸でも能く知て居る筈ずと云ふのは、先生か少壯修業時代に暫時水戸に遊び、その當時有名な軍學者で平山子龍と云ふ先生があつて、その先生を前から聞て居て遙々敬訪するのが水戸行の目的であつたのである。親切なる敎を受け感激して居られた、草雲先生から子龍の日常生活の狀態を拜聽したことがあるが、實に面白い身體で常に五貫目の重量を帶て居る、寢ても醒ても離したことがない、それから庭中一隅に盥を据え冷水を張り込み一日一度は必ず這入て丹練の法として居る。

子龍先生の主張は

「イザ鎌倉と云ふ場合に甲冑が重い、又寒中耐えられぬから水は渡れないといふのでは武

士の本分が盡くせぬ」と云ふ譯である。子龍先生が疝氣で困つて居ると友人が來て
「水入を少しの間止めればよいではないか」と云ふと先生言下に
「ドウシテ〳〵、そんなことでは武士になるものゝ面目に關する」
と擧丸を眞綿に包んで日課を怠らなかつたと云ふ。實に强情の父爺だが不撓不屈、凝つて鐵の如きところに面白味がある。草雲先生が子龍の居住の有樣を綿密に寫生されたのを滿裝して一卷とし、大切に藏されて居たのを見せられたことのある。先づ門から始て玄關書齋庭園まで終る、書齋の中央に子龍翁が白髮のなぜつけ、右手に鐵扇を持ち、熊の皮の上に端坐して居る、その周圍はまるで武具の古道具屋へでも行たやうに、刀は勿論幾振もあり槍鐵砲薙刀種ヶ島の大小幾種類かを立掛け突棒さつ股袖絡まで林の如く飾られてある。
隣室を見ると萬卷の軍書がある、其狀奇にして怪なることを記憶して居る。
櫻田血戰のことは秋元藩の家老であつた林友紀と云ふ老人が懇意て、その老人は萬延の當時神田駿河臺に在つた、秋元家は江戸詰で、三日上已の朝騷動を聞き付け、直に跣足となつて雪中を疾走して慘劇の後を見に行つたら、血痕淋漓でまだ生々して、今の司法省の

角あたりに有村治左衛門が立腹を切り、死骸を横にしてその上に一時菰を掩てあつたのと井伊家臣の死者の雪中に倒れて居るのを目擊したゝと見るが如くに能く話されて居た。

三十九　好きなもの嫌ひなもの

氣候に寒暖あり、時に晝夜あり、天に晴雨あり、事に善惡あり、道に邪正のある限りは自ら人に好惡あるは、自然の免れざる所である。道元禪師も
「花は愛惜に散り、草は忌嫌に生ず」
と云はれた。草の生へるのは厭やぢやと、如何に忌み嫌つても、草は遠慮しないでドンドン生へる、實に仕方がない。道元禪師の如き大高僧でも、草の生へるのは厭やであつたに違ひない。越前の深山の樹の間隱れに咲く花は、何とも云へぬ好い風情で、又特別愛されたやうである。こゝに人間の尊い所があると思ふ。
我が草雲先生も、逈然として俗塵を超越し、一面には仙人のやうな所があるが、それで物に好き嫌ひが非常に多かつた。それが又振つてゐる。嫌ひなものゝ第一は、算盤と時計

である。算盤が達者になれば、自然、金が欲しくなる。故に武士と女人とにはこの必要がないと云ふのである。時計はカチ〳〵云ふ時計の音を聞くと、如何にも日が短かいやうで、とても畫もおち〳〵描けぬからと云ふのである。

好きなのは葡萄酒、猪肉、カラスミ、鰹魚のせんじ、奴豆腐、鹽鯖の菊花漬、鰹魚の刺身、刺身は鰹魚に限る、外の刺身などは無くとも構はぬと云ふ程であつた。就中、好きな魚は海鼠であつた。汽車がまだ足利へかゝらぬ時代には、東京へ出るには熊谷までトコトコ歩き、そこから初めて文明の餘澤を受けて汽車に乘れた。故に先生は、東京の往復には熊谷の小松屋と云ふを定宿にしてゐた。

ある時、大好物の海鼠を、東京から買つて來て、先づ今晩は小松屋に宿つて、明日は足利へ歸つてこれを食ふのを樂しみに床に着いた。が、折しも八月の眞夏のうんきで、

「若しや海鼠が腐りはせぬか」

と、非常に心配して、ウト〳〵と成つた。と思ふと、サア大變！ 折角、持つて來た海鼠が、一疋々々、羽根が生へて、バタ〳〵と飛んで終つた。と夢を見た。眼がパッと覺めた

一場の夢とは知つたが、最早チッとはして居れぬ。直ぐ飛び起きて、預けてある小松屋の臺所へ行つて見た。これはしたり、大事な海鼠は暑さのために、とろ〳〵に腐つてゐたと云ふ話がある。これ位大好物であつだ。

四十　口紅の朱竹

雪輪小路の清瀨と云ふ料理屋で、或る宴會が開かれた。

その席に侍した藝妓の一人、小いロにコテ〳〵塗つた口紅の濃さ、紫色になつてゐるのを見るや、油然として興の湧いた先生は、

「おイ、畫を描いてやるから、紙と筆と、それから貴樣の唇を持つて來い」

と、可憐なその藝妓に命ぜられた。畫が描いて貰へると、飛び立つ程の嬉しさに、忽ちそれ等の道具を整へた。

「さア唇を出せ」

と云はるゝままに、無遠慮に突き出せば、先生はその新らしい筆に、水をつけられたかと

思ふと、それで美くしく塗つた藝妓の口紅を、すッかり拭み取つて終はれた。

その手で、息も吐かせず、直ぐ紙を展べられたかと思ふと、スッ〳〵と、竹の幹を描かれて、更に葉が二三片付けられた、思ひきや勢の好い朱竹が出來上つた。而もそれが格別上出來で、一同、覺えず喝采した。

口紅の朱竹、その才奇にして、その畫殊に妙、大評判となつたが、その畫は紅の代りに惜氣もなく藝者に與へられた、藝者こそ思はぬ福運を得たのであつた。

有爲轉變の世の中、藝妓が珍重した記念の朱竹も、次から次へと持主が代つて、猶ほこの女が浮き川竹に苦勞するやうなものであつた。轉展して早や數十年も經つた。或る年、上野で先生を追慕する餘り、草雲遺墨展覽會を僕が主催で上野美術協會内でやつた、先生の代表的作品を始め、山水花鳥、大小精麁、何れも氣品のあるものばかり、隨分、集つたこの中に一小品ながら頗る異彩を放つて、場中の視線を引いた一品があつた。曷んぞ知らんそは藝者の口紅で描かれた朱竹であつた。

一片の朱竹、以て當夜無限の清興を追想して、何れも感慨に堪へなかつた。それより早

や三十年を過ぎた。その朱竹、今は誰の手にあるにや。思へば血と紅とは違うか、桃花扇傳記に似たる風流佳話である。

四十一　喜の字の祝賀會

明治二十四年、先生正に七十七歳の折、喜の字の祝ひのため、土地の有志や門人等が斡旋して雅會を開くことになり、足利驛前の足利館の樓上を會場にした。頃しも菖蒲咲く五月のことで、陽は良し、世間の景氣もよし、かて〻加へて久しぶりの風流會であり、且は草雲先生の揮毫か數枚あると云ふ福引で、人氣をいやが上に煽つた。その上に花の都の東京からも會員が大分來ると云ふ通知もあつた。

恰も當日は天氣清朗、朝からドン〳〵と煙火を打揚げて、人氣をそゝり立てた。元より白石山房も來客でゴタ〳〵。追ひ〳〵開會の時間も逼つて來るので、氣早の連中は先生の出席を促して來るやら、上を下への轉手古舞ひ、然るに肝腎の先生は、宿痾の腸で、便所へ這入られたが容易に出て來ない。ボン〳〵揚る煙火の音に、人々は胸躍らせて居る折柄

勢ひ好く綱曳の人力車で、東京から乘越したお客が、白石山房の玄關へ停つた。而もその人は、土地には珍らしいシルクハットに洋服、風采の極めて堂々たる紳士である。出された名刺を見れば、錦雞間祇候金井之恭とある。この人こそ、有名な金井烏洲の倅で、殊に能書の聞へも高く、舊元老院議官で、先生とは父烏洲以來密接な關係を持つた間柄である

然るに取次に出た小生は、正直に

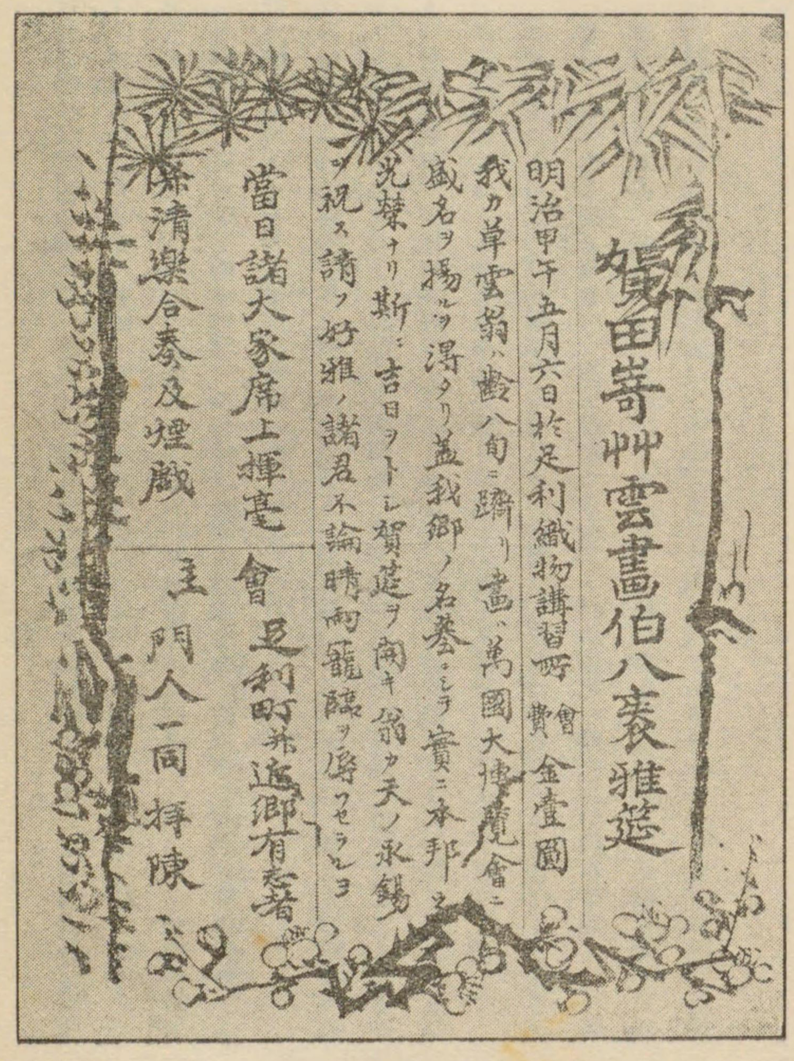
「只今用便中でありますから、漸時お待ちを願ひたい」

と申し入れると、之恭先生、怫然として御機嫌頗る斜ならず、

「他ならぬ自分が、遙々東京から態々來たのに、事もあらうに用便中だから待てとは失敬千萬だ」

とばかりに、ブイと立つて、その車をそのまゝ梶棒を返へさせた。有志の面々、如何はせんかと狼狽してゐると、漸く便所から出て來られた先生、仔細を聽いて、これは又反對に怒り出す、

「用便中であるから、お控へ下され」と



「打開けて云つたのが、何故悪い、その正直に失禮も糞もあるか、イクラ金井が錦雞の間祇候であらうと、やんごとなき紳士であらうと、その位のことに腹立てて歸るやうな奴なら、さッさと歸るが好い、遙々東京から來てくれたのは、獨り之恭のみではない、高等官を鼻にかけて乙に見識振つた生意氣の小僧だ、當方に落度は少しもない……迎ひにやるには及ばぬ、あやまる必要は毫もない……捨てて置け、うつちやて置け！」

と、持前の癇癖で大氣焔を揚げて居る。中に立つた有志は勿論小生も大に氣を揉んで兎に角、之恭先生を追かけて、低頭平身の結果、漸く諒解を得て、會場へ出て貰ふことになつて、初めて一同が胸撫で下した。そんなことにはお構いなしの先生は、五六人に取卷かれつゝ鐵道線路をコッコッ歩いて會場へ出られた。

會場には。青竹で手摺を設け、その中に先生の座を定め、雨のやうに降る杯を受けてをる。一方、設けの卓には祝文朗讀のため會主の三泉堂主人の川島平五郎が拍手に迎へられて、羽織袴で威儀を整へ壇場へ立つ、それが濟むと木村半兵衛は、弟凍雲を養子にやつた親戚關係で、祝辭を陳べる、地方から送られた祝辭祝文の代讀がある。近來稀れなる盛況

裏に、先づ無事に會も終んだ。

翌日、跡片付のため白石山房へ、關係の有志が集り、仕事も終んで有志連は歸へり、その後で古參の門人たる竹雲を筆頭に、例の松琴と古雲と茶村とが殘り、當日の盛況談や之恭の立腹問題で大分賑つた。丁度その前夜、少雨が降つたので、庭に蝸牛先生が自慢の角を振立てゝ、ヅルヅルと這つてゐた。スルト松琴は何を感じたか、庭から蝸牛をつまんで來て、誰に云ふともなく、

「この蝸牛ほど風流なものはない、自分は以來、號を蝸牛と改める」

と獨語いた。それを横車押しの古雲が默つてはゐず、

「何だ不見識な、蝸牛角上の爭ひと云つて、ケチの代表になつてゐる。そんなものを號に取るなど、馬鹿な考は止せ」

と賣つて出た。

松琴先生も何條以て默すべき、なか〳〵以て負けずに論鋒を立直し、えんや〳〵と互に甲論乙駁、何時果つべくも見へなかつた。喧嘩に花の咲く中を、謙遜の權化とも云ふべき

竹雲は、唯ニヤリニヤリと笑つて、渦卷に卷き込まれぬ細心の用意。何事にも風馬牛で、口斗りを可愛がる茶村は、臺所に陣取り、顏は金時が火事見無に行つたやうに眞赤にして何處吹く風と濟して御座る。予は後輩だから勿論後の方に居る。

この始終を見てゐられた先生は、側にゐた池田を呼んで、そこにあつた半紙に、山と水と云ふ字を書いたかと思ふと、その勢ひに直ぐ天狗面を描き、更に、

何ごともお先きくらまの天狗どの
自まんの鼻はのびすぎにけり

つまらぬ喧嘩を何時までもやつてゐるので、堪りかねて忽ち大喝一聲、

「何だ！　二人とも。竹雲を見ろ、一番故參でありながら、謹ましやかに控へて居るに拘らず、互に無益なことを高調子で爭ひ合つて八釜しい！　俺の前で何たるざまだ。モウ止せ〳〵！」

先生の一言で、二人もシュッとして終つて、一座は自ら白け渡つた。

喜の字の祝ひが終んだ翌日、

「俺も喜の字の祝ひまで生き延び、モウ何時死んでも心殘りはない。せめて面白く世の中を暮したいからお金(女房の妹)に賴んで、東京の方で相當な住居を探してくれと云つてやつたら、淺草の橋場に、元太政大臣の三條實美公の別莊が賣物に、出てゐる池田は隣町の今戸生れだが、その三條公の別莊を知つてをるか」

と問はれた。池田もあまり意外な話に一寸驚いたが、その別莊のことは知つてをるので、遠慮なく、知つて居るまゝを答へた。

「それはお揚り場と云つて、昔、將軍家で魚漁を催した時、將軍が上陸する場所に定められた跡で今では「上の渡」と呼ぶ渡船場で、隅田川に臨み向島を一目に見渡す風景絕佳の場所で、建築は、京都風の厚い茅葺屋根の二階建で、最も古雅で閑靜である」

と、話すと、先生も初めて諒解したやうであり、且つ大に氣に入つたやうで、折返し義妹の所へ、寫眞を送れと云つてやると、四五日の內には早や寫眞が來た。

話はだん〳〵進んで、中に立つた人と略ほ値段まできまり、白石山房を居拔きのまゝ移轉しようと云ふことになり、今にも引移りそうに進んでゐたが、何を感じたのか俄にそれ

は立消になつて、依然として白石山房に落付いて居られた。或は何かの動機で人を驚かす例の皮肉と惡戲半分の洒落であつたかもしれない。

四十二　茶村の愛嬌

茶村は一名痴雲と呼び、極めて愛嬌者で、白石山房には無くてならぬ蕎麥の藥味であつた。別段これと云ふ特徵もなければ毒氣は更に無く、まことに好々爺で、烏の啼かぬ日はあつても、茶村が白石山房に來ぬ日はなかつた。

強いてこの人の特徵を求むれば、內所酒で赤い顏をしてゐながら、飲まぬふりをして、師匠が目敏く發見して、

「茶村復た飲んだナ」

と云はれても、平氣で、

「否、手前は頂いては居りません」

と否認して終ふそれで少しも罪がない。

或る夏、雨後の庭から赤蛙を捕へて來た師匠が、頻に燒いて居ると。茶村いきなり、

「大そうおいしさうな香ひで御座います、一つ手前にも頂かせて下さい」

と云ひつゝ、ムシャ〳〵と掴み喰ひするので、翌朝、師匠がからかひ半分に、庭から蝸牛を集めて來て、醬油の附燒をして居ると、その甘さうな香ひに、何處から來たが茶村がやつて來て師匠が燒いてゐるのを平氣で手に取りながら、

「又今日も、手前、頂戴致します」

と、云ひも終らぬに、口の中へ投げ込み、傍の見る目も、如何にも甘さうに喰ひ始めた所で、人の悪い師匠が、圖に當つたと思ひ、

「どうだ茶村、足下のために燒いて居るのたから澤山食ふが好い、併し昨日の味とはどうだ」

と云へば「洒々然として、

「結構です、殊に今日の方が肉澤山で柔かで御座います」

と云ふのを待つて、師匠はおかしさを忍んで、

「茶村、驚くな、今日のは蝸牛の附燒だ。能く何でも食ふ奴だ」

と、叱するが如くに話さるれば、喫驚するかと思ひの外、平氣なもので、

「蝸牛がこんなに甘いのですか、今日までそれとは知らなかつた、それなら明日から手前自身でかり集め、澤山燒いて食べませう」

と、却て師匠の方を驚かせて終つた。

酒飲みには有勝ちの痔、師匠も矢張りその數に漏れず、可成り痔のために苦るしまれた故に時折、蒟蒻を湯で熱し、布に包んで肛門に宛て、一時の苦痛を凌ぐことがある。今日はその痔疾が起つたと云ふので、別な方法を以て、握り飯を燒いて布に包み、肛門に宛てゝ蒸してゐたが、幸ひにして程なく痛みも鎭まつたので中止した。夜になつて師匠が肩を摩ませながら、

「茶村、晝間の握り飯があるだらう、後から燒き直して溫めてくれ、復た肛門へ宛てゝ寢るから」

と云はれると、茶村大に驚いて、

「あれはモウ一ッもありませぬ」
「どうした」
「ハィ勿體ないから手前が茶受に喰べて終ひました」
と云ふので師匠も大に驚き、
「馬鹿も程がある。何だと思ふ臀部に宛てたものでないか、いくら勿體ないとは云へ、不潔と云ふことを知らぬか、それを尊い口へ入れるこそ却て勿體ないのぢや、燒いて食ふとは呆れた奴ぢや」
と、驚きつゝも叱られると、茶村は更に平氣で、
「へエー、たとへ臀郎に宛てたとは申せ、布で包んであるので中までが臀部に宛つた譯でなく、決して不潔なことはありませぬ。たとへ觸つた所で、師匠の臀部だ、何の不潔いことがあるものですか、師匠樣の肌身に觸れた御飯なら、頂きたいと云つて頂けるものでない、それこそ勿體ないのです」
と、勝手な理屈を付けて愛嬌たつぷりに、師匠も怒る譯にも行かず、呵々と笑つてをられた

斯うして白石山房唯一の愛嬌者として、師匠は勿論、來る人々にも可愛がられてゐた。
茶村が一番の大役は、夜分になつてから師匠の圍碁の對手をすることであらう。先生は
「茶村、貴公が三番の中二番勝てば、貴公に絹地の富士を描いてやらう、俺が二番勝つたら、貴公は按摩をするのだ」
と約束して、碁盤に向つた。先生が負けかゝると、
「待つた〳〵」
が連發されて、茶村はおとなしく待つが、茶村が負けかゝつて、
「待つた」
と云はうものなら、先生はなか〳〵承知しない、
「待つたなしだよ」
と來る。それでも茶村は決して爭はぬ、へイへイと云つてをる。それでは何遍やつても、勝敗の數は決つてをる。それでは如何にお人好しの茶村でも、興が乘らないのは當然だ。
仕方がないからサッサと負けて終ふのが茶村の一德位のものだと、內々自分でもそう言

をきめたので、決して待つたに小言を云はず、ドンドン進んで行く。茶村が早負の腹を知つた先生も、

「茶村、貴公、昨今は負けるために碁を打つてをる、それでは少しも樂しみにならんではないか」

と云はれ、茶村はハイハイ

「手前はとても先生には敵ひませぬ」

と云ひながら、ドンドン碁盤を片付けて、サッサと師匠の背中へ廻つて按摩の役目を果して、臺所へ引上げて、例の盜み酒を傾けながら、

「まじめで碁を打つてをれば、夜が更けるばかり、どの道負けると決つたかけなら、少しも早く負けて、せねばならぬ按摩をするのが、此方の掛引と云つたものだ。」

とつぶやきつゝも、内所酒に喉を霑すのが、罪のない茶村の樂の隨一であつた。

先生が自分で描いた畫の落款を紙で掩い、

「茶村、誰が描いたのか鑑定してみな。」

と云はれ、一捻り首を捻てるたが、

「ハイ手前には分りませぬ」

で、押通すほど鑑識眼を備へた茶村、他所へ行くと

「なアニ、師匠が描いた畫も、手前が描いた畫も、別段に違ひはありません」

と、突放して濟したものだ。これでなければ、師匠の前で、師匠の畫を、

「誰が描いたか分りませぬ」

とは云へぬ筈だ。自分と師匠と變りがないと思ふ程だから、眞僞の鑑定もつかぬ譯だ。先生は能く嘆じて曰く、

「彼が故參の門人だが人の善いばかりでも困たものだ」といはれた。

茶村と碁を打つて居られた先生、

「この頃は、大分、雲の字が流行るから、足下にも一つやらう、痴雲か好い」

とつけられた。痴雲でも頑雲でも、茶村は平然として、ほゝ笑んで居る。それから痴雲と號したのである。

當時痴雲先生町の方へ急須の買物を先生から命じられた。買戻て恭しく先生の前へ出すと、先生檢分して

「これ茶村口が破損して居るではないか」

「ハイ」

「貴樣達の買物は恰も大名の御買上見たやうなものだ俺がこをゆうものを買物する時は其の器に水そ入れて漏るか漏らぬか試驗濟の上なければ買ぬから今まで決して間違たことはない」

絶對服從の茶村は

「誠に不注意でした」

「先生何んでも申譯ないと云えば濟むと思うか申譯ないで此の口が直るか」

と大目玉を頂戴する。又或時藥種屋へ買物にやられた白き粉藥の袋に赤き僅かばかりの色が附てゐたすると

「茶村近く寄てこれを見ろ貴樣はいつも不注意で相濟んと云ふて居るが口はかりではない

か、之れが白き藥に赤き色が附いて居るから直ぐに分明するが、若し白き藥に白き毒藥でも附着して居つたら卽ち俺を殺すことゝなる、俺を殺してもいゝのか」

と、言下に鐵拳の御見舞を蒙つた、其の話を私が鄕里館林から山房へ行た時、茶村から細ま〳〵と話され、泣きそうな顏をして居るのを見て氣の毒のことであつたと同情したことがある、先生の細心の注意に驚かされた。先生が常に云はるゝに

「茶村と云ふ奴は洵に意氣地のない野郎だ、俺は既に齡八十以上だ、茶村はまだ七十だ、俺から見れば子供じアー、老軀事に耐えぬとは呆れたものだ」

といふ、以て先生の鑊鑠知るべきである。

四十三　皇居の揮毫

思ひ起すだに洵に恐れ多き極みなれど、畏くも　明治天皇、御居間の襖、天井等は皇居御造營の折、草雲先生が御命を拜し、齋戒沐浴して描き奉つたのである。隨て　皇后陛下の御居間の地袋の戸、その他御伺所も、描き奉つたのであつて、　天皇陛下の方は水墨に

して、　皇后陛下の方は着色にして、且つ畏くも　皇后陛下の御好みに隨ひ奉りて、主に古今集の和歌の意を表はしたのである。この時の下畫は、記念のために足利鍍阿寺に寄附された。殊に着色のために一段苦辛されたので、白石山房の二階に閉籠つて專心一意に描き奉つたのであるが、折しも眞夏の頃なので、降雪の日にも四方の障子を開放しにする程の先生が、金砂子を施すために、微風だも恐れるので、珍らしくも障子を締切り、唯さへ熱苦るしいのにイヤが上の熱さで、勿體ない申條なれど、誠に堪へ難かつたが、それを能く辛抱して、何の障りもなく無事に御用を達したのであるが、今でも當時を偲び奉つては

「眞に畏れ多い極みである」

と、時折、感涙に咽ばれたが、内にも外にも、先生一代の光榮であつた。

當時、在京の各大家は、漢詩は畫に描けるが、和歌は描き悪いとのことで、南畫に於て殊に至難であるに、先生がこの畫に就いて、寧ろその技量を怪しんでゐたが、先生は、詩でも歌でも同じことであると云ふ意見で、一層の責任を以てやられたので、出來上つた結果は大に自信があつたと共に、初め懸念した人々も、流石は先生だと驚嘆したと云ふこと

である。

今では内親王殿下と成らせられたる、周宮、常宮の兩殿下が、まだ御幼少の折、御避暑のため、宇都宮の朝陽館に御滯在遊ばされた時、御附き申上げてゐたのは御教育掛の佐々木侯爵であつた。軈て侯爵を經て、富士を描くようにと御用命があつたので、先生は恐懼して直に描かれた。その序に、先生自身が裸體になつて、一生懸命に畫を描いてゐる圖を描いて、お慰みのために兩殿下に献上するつもりで、例の茶村が持つて朝陽館へ納めに行つた折、土地の中村庄助と云ふ元織屋の主人が同行したいとの希望なので、先生が承諾の上、二人が宇都宮へ同行した處、元來この人は、「和泉庄」とて、朱子織屋として土地でも屈指の家であるが、なか〳〵の酒豪で、鳥渡、調子も普通人とは違つた處があつて、いよいよ朝陽館へ行くと云ふ途中で、相手の茶村も亦風變りの男であるから、お互に機嫌好く一杯を傾けて、宮殿下の御前へ罷り出たのは好いが、酒氣を帶びた和泉庄の主人が、場所柄もわきまへず、小唄など謡ふので、流石ゆ茶村もヒヤ〳〵して注意すると、佐々木侯爵は又極めて平民的な人で、

「御幼少の宮殿下のことであるから、決して心配に及ばぬ、却てその無邪氣が面白い」
なぞと云はれたものだから、和泉庄ます〳〵興がつて、
「宮殿下に直々お目にかゝりて勿體ない」
と、頭を疊へ摺り附けて御辭儀をすると、まだ御幼少の兩殿下は、和泉庄の頭を御手で撫で給ひては興がらせ給ふた。中村庄助はこれを非常な名譽と感激して、家へ歸つて赤飯をふかし、知己の人々を招いて祝宴を開き、大枚貳百圓も使つたと云ふことである。先生もこの話を聞いて、
「和泉庄も一寸變つた奴だ」
と、鳥渡、驚かれた。

四十四　獸肉黨の洗禮

先生は一見、磊落にして豪放、世の中のことには如何にも無頓着のやうであるが、その一面には驚くべき御幣擔ぎで、全く矛盾のやうである。

或る時、池田が町へ出たら、牛肉が如何にも甘さうに店頭に下がつてゐたので、物好きに買つて來て、臺所で一人で煮て食つてゐた、紛々たるその臭氣、とても防ぐ譯には行かぬ、二階にゐられた先生、その異樣な臭氣に堪へず、何をやつてゐるかと怪しみつゝ、二階から降つて臭氣の方へやつて來ると、それが臺所で、池田が甘さうにやつてゐる所だ。それを見るや否や、見る〳〵血相が變つたかと思ふと大喝一聲
「馬鹿！　貴樣の煮てゐるのは何だ、獸肉ではないか、四足の肉を煮るなら、外で煮ろ、そんなものを家の中で煮られては家が穢れる」
と、眞向から叱り付けるので、池田はます〳〵落付いて、
「これは牛の肉ですよ」
と云へば、暫し不思議さうに見てゐたが、どう心機が一轉したものか、
「大分香ひは甘さうだ、俺も一箸食つて見よう」
と、打つて變り、ニコ〳〵して一口食つて見たが、
「成るほど甘い、牛はこんなに甘いものか、これは好い、後で俺にも買つて來てくれ」

と云ひつゝ、早や五六口も食つて終つた。

翌日、牛肉を一圓程も買つて來て貰ふと、昨日の四足排斥論者は、一夜の内に熱心なる牛肉黨になつて終つた。それからは毎日、食膳の御馳走となつた。が、足利邊では、夏になると牛肉が無いので、遙々東京から取寄せて食ふと云ふ贅澤になつた。

それから大分後になつてからだ、池田が町へ出たら、知る邊の家で、今日から馬肉の切賣を開業したから是非買つてくれと云はれたので、お祝ひの心持で少しばかり買つて戻り又臺所で煮てゐると、この時まで、新築された畫室で、出入の植木屋を捕へて何か頻に叱つてゐた先生は、又鼻を襲く香を嗅ぎつゝ、臺所へやつて來た。これを見るやいきなり、

「それは牛ではなからう、香ひが一寸違ふ、何だ?」

と云はれるので、池田は正直に、

「へエ牛は牛でも、角の出ないのであります」

と答へると、先生は怪訝さうに、

「角の出ない牛?」

と暫らく考へてゐたが、直にそれと分つたので莞爾として笑ひ、

「あゝ分つた、角の出ない牛、それは午だ、馬の肉だな」

と合點したが、忽ち言葉を變へて、

「馬肉などは、革坊の外に食ふものぢやない、いくら肉が甘いからとて、それだけは止めてくれ」

とおとなしく云つたまゝ、畫室の方へ靜に戻つて行つた。

赤蛙も蝸牛も食つてその味を知らぬ茶村などとは違ひ、流石に嗅覺は鋭敏だ。戻られたのを幸ひ、池田は平氣でまだグツ〳〵煮てゐると、

「これ!〳〵!」

と消魂たましく呼ばれるので、何事か!と驚いて、池田が飛んで行くと、

「まアそこへ坐れ」

と命ぜられてから、更に威丈高になつて、

「まだ食つて居る!?」

と叱責せられた上に、馬肉を食ふことの不都合を諄々説かれると共に、案外立腹して居られるので、池田は大に辯解に努めて、

「已に猪肉を食ふ以上、牛でも馬でも五十歩百歩で、四足と云へば猪も牛も馬も同じで、何の擇ぶ所もない」

と云ふと、初めて合點されて、俄に我が折れて、

「そう云へばマアそんなものかナ」

と、御機嫌が直つた。

この時、庭の松の木に階子を掛けて仕事してゐた植木屋の金公が、止せば良いのに江戸の仇を長崎で討つとでも思つたのか、池田の顏を見つゝ、ベロリと長い舌を出して笑つたそれが又運の惡るさ、障子にずつとその影が射した。それを目敏くも見つけた先生、ムカムカとせられて、

「オイ金公！　一寸こゝへ來な！」

と呼び寄せた。南無三、失策た！　と思ふたが已に遲かつた。先生は呼び付けて、

「お前は今、何で舌を出した、先刻、俺に小言を云はれた腹癒せに、今、肉の議論で俺が敗けたのを笑つたのだらう」

と小言が初つた。好い機會と、コソ〳〵と池田は逃げて臺所へ來ると、肉は丁度、好い具合に煮へてゐるので、早速箸を執つた。

暫らくすると、金さんの小言も濟んだと見えて、復た先生が臺所へやつて來た。これは失策つたと思つたが、案に相違して、今度は善いとも惡いとも云はず、池田の食つてゐる馬肉を一寸一摑み食つて、

「これは柔かい、別に變つた味でもないが、牛と似たり寄つたりだ」

と、ニコ〳〵してゐた。

これからは、今まで擔いでゐた御幣を、すつかり捨てゝ終つて、熱心な獸肉黨の洗禮を受けられた。

四十五　腐つた鯛の土産

名古屋の畫家で橘雲鶴と云ふ人が、少し描くつもりで來て、四丁目の甲子屋旅館に宿つた。就いてはお近づきにと、先生の所へ挨拶に來たが、先生が鯛が好きだと聞いて、一尾の鯛を手土産として携へて來た。この人は花鳥畫家と聞き、足利には珍らしいから暫時滯在して遊んで行くが好い、出來るだけの盡力はすると云はれたので、本人は非常に喜んで歸つた。あとで夏のことだから味の變らぬうちに料理しようと、好物のことでもあるから、先生自ら庖丁を執つた。見るとこれは驚いた、早や少し腐つて居る。すると先生はブリブリと怒られて、

「人間が世渡りするには禮儀が必要である。その交際に缺いてならぬものは禮儀である。人を訪問する時土産物を持つて行くのも亦禮儀である。その土産物を持つて行くに就ては、餘程、注意せねばならぬ。別段立派な品や高價な物には及ばぬが、破損した物、腐敗した品などを携へて行くことは、禮儀作法に戻つた行爲である。殊に品物の破損は暫

らく措いて、食物の腐敗したのに至つては、無禮千萬である。若し誤つて食つて、それがために中毒でもしたならば、その人の命を取ることになる。土産物は形式であるから破損してゐようと、腐敗してゐようとも構はぬ、と云ふ氣でなければ、腐つた魚など持つて來られた義理ぢやない。こんなものを持つて來るなどは、結句、俺を馬鹿にして居るのである。こんなものを食つて、若し死んだらドウする。捨てゝ置けば好いやうなものゝ、これでは雲鶴のためにならぬ。知らぬ振して咎め立てせぬのは却て不仁の仁、不義の義である。憎まれても云ふのは、雲鶴のためで、俺のためではない」

と、吻々として怒つて、雲鶴を呼んで來いと云つて、容易に承知しない。仕方がないので茶村が甲子屋へ迎へに行つた。

雲鶴は何事かと怪しみつゝ來た。思つたことは遠慮なく云ふが氣性の先生、鯛の腐つた一條をドシ〳〵と打ち撒けて、

「誤つて食つて、中毒を起しても構はぬか、それを氣の毒とも、濟まぬとも思はぬから、こんなことをするのだ、夫れは俺を輕んじた行爲だ」

と、ビシ〳〵遣ッ付けた。雲鶴も固より悪意でやつた譯ではなし、頗る恐縮して低頭引下つた。

四十六　銀婚式の献納畫

明治天皇銀婚式の前七年、杉孫七郎子を始め宮内省高等官數名が、畏き邊へ獻納のために、先生へ平遠山水の揮毫を依頼して來られた。そうしてその絹地は、箱へ入れて送られたが、その箱のまゝ、下座數の十疊の室の鴨居に沿うて置いて置いた。

元來作家は兎角物嗅く、絹地を箱入のまゝ、若くは枠張のまゝで、數年間も手を掛けられないことは能くあるので、敢て珍らしくはない。白石山房では、枠に張つた絹を、四方の壁へ立てかけて置くので、壁より三尺も四尺も嵩み、遂に壁と云ふものは見へない程である。又箱入のまゝの絹地で、戸棚は大概一ぱいになつてをるので、先生も時々、

「俺が死ぬまでには、それ丈の絹は描き盡せぬ」

と笑つてをられた。

それは毎日の來客の應接や、諸方からの手紙も一應は見なければならず、好い都合で一旦、燒筆をあてゝも、氣に入らねば幾度でも描き直すので、一枚の畫も容易に出來るものでない、一寸、傍で考へるやうに簡單に行くものでない。殊に先生も、氣は丈夫でも、年が年で正に老境で、其點は普通の人と變らない。

そんな譯で、折角、宮内省から送つて來た絹地も、そのまゝ貯ひ込んで、つひ忘れて終つた。來年はいよ〳〵銀婚式と云ふ前一年、催促狀が來たので、はつと氣がついた。早速その絹を調べて見るとこれはしたり！　あまり長いので、虫が食つて、網のやうな穴だらけなので流石の先生も驚かれた。仕方がないからその旨を正直に返事してやられると、あれは京都の西陣から取寄せたのであるからと直ぐ重ねて注文してやつたと返事が來た。

今度こそ直ぐ描かねばならぬと、早速、下畫を準備されたが、何しろ横が六尺、縱九尺と云ふ大ものである上、獻上品と云ふので、非常に丹誠を籠められたので、先生も隨分苦しまれたやうである。

漸く絹が屆いたので、先生は早速描かれたので、幸ひに銀婚式に間に合つた。

「初めて重荷を卸した」
と、この當時頻に話された。

四十七　まアちやん

白石山房には、何時も女中が五六人はゐた。この中にまアちやんと云ふ可愛い娘がゐたことがある。これは東京から、行儀見習に來てゐたのであるが、何でも父親は舊幕の旗下であつたさうだが、故あつて夫婦別れをして、母親は、あらうことか、昔の臣下の男と夫婦になり、四谷邊で洋酒の釀造を始めた所が、工合良く成功して相當の成金となつてゐたが、世話する人があつて白石山房へ奉公に來たのである。その頃、年はまだ十四であつたが、至つて怜悧で、極めてハキ〳〵した氣性で、時には無遠慮な振舞もあつたが、なかなかの愛嬌者で、仲間中でもまアちやん〳〵と持て囃されてゐた。

その頃、足利から四里も離れた桐生の町に、金木屋と云ふ旅館兼料理屋があつた。こゝの女將がお由さんと云つて、若くて其料理屋の酌婦をしてゐたころ、先生と特別の事情が

あつたらしく引つゞいて往來してゐたので、その頃は月に二三回はやつて來た。或る日、例の如くそのお由さんが來ると、まアちやんは外の女中を押のけて、私が取次ぐと云つて二階へ驅け上つた。今一生懸命に畫筆を執つて居らるゝ先生の所へ行つて、さも無遠慮に

「先生、桐生から金木屋のお由さんが參りました。」

と、大きな聲で云ふと先生は漸く筆を止めて、

「え、うるさいなア！」

と云ふや否や、その言葉尻を捉へて、

「うるさいのでなく、うれしいのでしよう」

と、からかうや、先生も默つてはゐない、それを聞き咎めて、

「まア子、何だ！　もう一度云つて見よ」

と叱られた。

が、それ位のことで、眞赤な顏をして引込むやうな女でない、毫も懼氣もなく、齒切れの好い調子でハツキリと、

「うれしいので御座いませう」
と繰返したので、流石、豪放な先生も、呆氣に取られて、
「まア子には叶はない」
と兜を脱がれた。
萬事がこの調子であるが、少しも毒氣はない。又或る時、魚屋が置いて行つた鰹を、先生が自慢で自ら料理を始め、これを頭から庖丁を入れて三枚におろし、大名おろしと云つて、中身の胴骨に澤山肉を付けて、上肉だけを刺身に作り、餘りの部分を切身に刻み、中落ちの骨付をそこへ置き、刺身と切り身とを持つて二階へ登りながら、
「そこへ置いた切身をコロ(愛犬の名)にやつて、中落ちはお前達が煮て食べな」
と云ひつけて、畫室へ姿を消された。
あとでまアちやん、何を感じたか、ドン〳〵足音高く二階へ馳け上り、先生の側へどッかと坐り込んで、
「鳥渡、先生に伺ひます、犬と人間とは、どッちが上で御座いませうか」

と奇問を發した。流石の先生も度膽を抜かれたが、
「まア子にも似合はぬことを聽くぢやないか、人間は萬物の靈長で、犬や猫は畜生で、人間より下とは昔から決つて居る」
と、敎へるやうに云はるゝや否や、待つてゐたとばかりに、
「それだのに、白石山房では、人間の方が犬より下であります、何故ならば、鰹でも、良い方を犬にやり骨のついた中落を人間が頂くのですもの、先生は、コロの方が私等より上だと思つてゐらつしやるのですか」
と、淀む所なく滔々と辯じ立てたので、先生もこれには弱つた。
「それはまアネ、俺が惡かつた。そんならこれからは、コロに中落をやり、切身はお前達が食べるやうにしな」
と、先生が謝つたので、まアちやん勝ち誇り、辷るやうに降りて來て、
「さア皆さん、今日からは私達がコロより上になつたのです、切身の良い方を皆さんで頂き、中落をコロにやることに談判して來た」

と、大氣焰で報告に及んだ。この氣性、この調子が却て先生の御氣に入り、まァちやんまァちやんと三度の食事にも、傍を離れず世話するやうになつた。

或る夕、例の通りまァちやんのお酌で、先生の晩酌が始まつた。ニコ〳〵しつゝ熱い杯を口を持つて行くと、忽ち飲んだ一口をプィと吐き出し、

「ああ嗅い！　まァ子、外の杯を持つて來な」

と云はれたが、まァちやん頗る平氣で、下から外の盃を持つて來て注いた。早速飲まれたが

「これも嗅ひ」

と云ひつゝ、燗徳利の香を嗅ぎつゝ、

「お前、徳利を好く洗つたか、大分、石油の香がするよ」

と云つたが、何事にも敏捷な先生は、まァ子をそこに置きながら、自分でトコ〳〵と臺所へ來て、女中頭のお新さんと云ふ年寄に向ひ、

「お新さんや、まァ子はまだ年が行かないのであるから、何事に限らず、お前が能く注意してくれ、……今夜の酒は、石油嗅くて飲めないではないか」

と云はれたので、お新さんもはッと氣がつき、

「おや左樣ですか、そう仰しやられると、まァちやんが先刻、石油の這入つて居る椽の下から、徳利を出してゐたのを見ましたが、ヘンなことだと思つてゐました」

と云ふと、先生は忽ちハタと感付き、トン〳〵と二階へ戻り、そこにぢッと坐つてゐるまァちやんに向ひ、

「お前、燗徳利へ石油を入れたな、間違へて入れたのか、又は承知で入れたのか」

と問はるゝと、まァちやん頗る平氣で、泰然として少しも悪びれもせず、

「ハイ、承知で入れました」

と簡單に答へたので、

「それは何のためだ、先生を殺すつもりで入れたのか」

と、重ねて叱するが如く問はるゝと、まァちやん、一層落付拂つて、

「え、え、先生を殺す氣で入れました、それと云ふも、私は東京へ歸りたくて〳〵ならないので、お母さんに度々手紙を出しても返事もくれませぬ、今は矢を楯も堪らなく、せ

めて先生か死んだら歸れるかと思つた餘り、石油を入れたのです」
と、隱さず正直に、思ふまゝ自白したので、先生も憎いよりは可哀相になり、
「それ程歸りたいのなら、先生からお母さんに話してやらう」
と、直ぐ電報を打つて母を呼んだ。母は驚いて飛んで來たが、右の次第と分り先づ安心した。そこで心得違いのないように能く云ひきかせて、母につれて歸へらせた。
まアちやんが暇を取つて行つた後、置いて行つた小箱の中を見るとどッさり紙屑がある擴げて見ると、四君子や花鳥の手習ひ紙である。而もそれがアッと云ふほど上手に出來てゐるので、先生も驚かれて、
「こんなに巧いのか、これだけ描ける手を持つてゐたのなら、少し教へてやれば好かつたに」
と大へん惜まれた。
「こんな好い子だ、どうか大それた行をさせたくないものだ」
と、何時までも〳〵惜んでをられた。

無邪氣な子供とは云ひながら、隨分、亂暴なことをやつたものである。若しこの子が、ずッと眞面目で働いて、畵の稽古でもしたなれば、屹度、上達したのであらうに、返す返すも惜しいことをした。

四十八　殊勝な心と怪偉の相貌

或る年の七月お盆、何と思はれたのか、俄に
「今日は皆でおはぎをこしらへて、佛樣に上げてくれ」
と云はれた。內の佛樣と云ふものを祀られたことは殆んどないので、皆の者は却て驚いて
「佛樣て誰のことです？」
と問ふたら、先生は無雜作に、
「家內と格太郎のことだ」
と返事された。妻や倅のために供養されると云ふのは、殆んど空前とも云ふべきで、一同は驚きつゝも、早速おはぎをこさへて、佛樣にお供へした。先生はそれを、どれ位うれし

く思はれたか、佛前に殊勝に端坐して、恭しく合掌して、チンと磬を敲きつゝ戒名を唱へて恭しく菩提を弔はれた。先生のこの心！美くしいと云はうか立派と稱すべきか、この回向こそ誠に千部萬部の讀經にも增した大功德である。

倅格太郎の切腹した時には、佐幕黨の果だと云ふので、朝敵が一人減つたと、口には立派に云へど心には泣かれたのである。今日、心から喜んで供養されること、自分にも如何ばかり滿足であつたらう。

佛の供養と云つても、徒に形式に捉はれることは大嫌ひだ。自分の日常生活でもそれであつた。着物は、着れば着たなりで、着替をすゝめても決して更衣はしない。按摩をするにも、草取をするにも、鳩羽鼠の羽二重の紋附で、ずる〳〵と土の上を引摺つて平氣で居る。そうかと思へば、そのまゝで東京へ行く。履物は時代遲れの雪駄一足、その外には駒下駄も足駄もない、春夏秋冬、唯一足、雪駄をチャラ〳〵と音立てゝ濟ましたものだ。例の鳩羽鼠の羽二重の紋附に、黑の五ツ紋の羽織を引掛け、白博多の帶に大きな朱色の印籠を提げた所は、どう見ても芝居の浪人侍だ。併し十三文半と云ふ圖抜けの足袋を履く程の

大男で、八十になつても頭の毛一本も拔けず、齒も前の方は並び好く揃つて居る。從つて音吐も朗々として高く、顏にはぢゞむさい皺一つ有るでなし、腰は更に曲らず、反身になつて大股に濶歩する所を見ては、誠に威風堂々たるものであつた。就中、兩端が下つて堅く締つた口が大きく、陣笠狀をなせる顏附には、頗る怪偉の狀があつて、自ら偉人の相があつた。名は體を表はすとでも云ふのか。

毎朝五時の起寢が常であつて、嚴寒の時でも氷を裂いて顏を洗ふ。予は少壯より朝寢坊で物嗅だつたから能く先生に叱言を云はれたのを覺えて居る。或時布團をはいで眠て居る、と先生が來られて布團をソッと掛けて下すつたと云ふことを後で聞き恐縮したことがあつた。

四十九　昆蟲の寫生

仙人のやうな先生でも、自分で勝手に自藥だと名づけて、淺田飴とコンデンスミルクとを混ぜて、それに湯をついで飲むこと、日夜數回に及ぶので、飴とミルクの空罐が、月に

十箇以上も貯る。平生大酒家でありながら、こんな甘味を平げるは聊か矛盾のやうだ。殊に床の中で、飴をしやぶる時に、例の長い腮髯にからまり、手もなく駄々ッ兒の振舞だ。

白石山房の庭には、蟲の種類か澤山ゐた。不思議なのは、家の後の方に居る蟻は、背中に四本の爪が生へてゐて、他の蟲などを捕へると、背中の爪で挾んで脊負つて、我が巣へ持つて行く。又前の方に居る蟻は、頗る大きく黑色で、如何にも逞ましいが、育つに從つて羽翼が生えて、蜂のやうになつて飛んで行く。この異つた二種の蟻を捕へて、喧嘩をさせるのを先生は樂しんでゐた。

これは種類も違ふから喧嘩させても面白い。五合庵の良寛禪師が、虱に角力を取らせたと云ふよりは興味があるが、蟲を愛する心持は同じで、凡人の思ひ及ばぬ所である。

そうしてその勝敗は、十中八九は、背中に爪のある方が勝つた。

又庭の四阿の床下の砂に、摺鉢狀の小穴を作り、その穴へ他の蟲類が誤つて辷り落ると砂の中から土虎と稱する異樣な蟲が現はれ、落込んだその蟲を砂の中へ喰はへ込んで終ふ。それを砂をかき崩して土虎を捕へたら、小皿に砂を盛つて穴を作らせ、その穴へ蠅を捕へ

て入れて、土虎が引込んで行くのを、面白がつて先生は見てゐた。まるでお坊ちやんだ。

極めて堅い土に穴を掘つて、この穴に棲んでゐる頭の黑い、身體の白い蟲が居つた。燈心の先に油をつけて穴の中へ差入れて、その蟲を釣り出すのを先生は面白がつて、閑暇つぶしに能くやつてをられた。これ等も全く垢拔けがしてゐる。

裏の小川に、細長い螺線狀の小さい貝がゐて、夏になると杭などに登つて日に照らされてゐると、忽ち赤蜻蛉に化して飛んで行く。その貝を捕へて來て、赤蜻蛉になるのを樂しんでゐた。

渡良瀨川の名物である河鹿と呼ぶ蛙の一種を、水鉢に水を入れて飼つて置くと、夜、靜かになると、河鹿がそれは〳〵好い聲で鳴く、恰も銀鈴を振るやうだ。先生はその聲を聽くのを樂しみにしてをられた。

硝子の空瓶の中へ、蜥蜴を生き飼ひにして置き、その瓶を横にして、壘の上を這つて居る蠅を、トカゲが瓶から出て來て、巧に蠅を喰へて復た引込んで行く、それを樂しんで見て居られた。

先生が如何にも無邪氣に、蟲類を愛して見て居られたのは、一面には、愛であり同情であると共に、他の一面では、斯うして遊んでゐる間に、蟲類の寫生、研究に努めて居られたので、遊んで居るやうに見えても、實は遊んでゐるのでなくて、研究して居られたのである。それ位、研究に熱心なるには驚かざるを得ない。之れを思ふと自分等の勉强の足らざるは慚愧に堪えないのである。

五十　惡戯の復讎

先生七十六歳の時、狩野派の畫家で新井勝重と呼ぶ同年輩の人が、土地にゐたが、書畫會を催す相談を持込まれ、應分の力を盡さうと云ふことになり、法源寺の本堂を會場に充て、目的通り會を開いた。東京から池田琴峰、村瀨玉田、菅原白龍の三畫伯が臨場され、席畫を描くことになり、會は盛大に催され、書家では柳田正齋の息半湖も來て、可成りの成果を收めて會は無事に濟んだ。

夫から約半歳程の後、それが緣となつて菅原白龍が遊歷に來て、甲子屋旅館に滯留して

揮毫の需に應じた。所が三尺巾の絹本に、極密の青綠山水で、潤筆料が驚く勿れ、金參圓と云ふので、隨分依賴者があつた。すると土地の人が、白石山房へ來て、談偶々その事に及ぶと、

「一體、先生の潤筆料は高過ぎる。白龍は東京の大家で、三尺絹本の密畫が、僅に參圓で描いてくれるに」

と、不平らしいことを云つて戻つた。丁度その翌日、白龍が白石山房を敬訪した。無遠慮な先生のことゝて、

「唯參圓で君のやうに密畫を描いては、藝術の價値に大關係がある、斯界の爲に甚だ寒心に堪へぬものがある」

と、始めのほどは諷刺的になだめてゐたが、段々語氣が荒んで來て、

「錢が慾しいのなら商買でもするが良い、苟も南畫即ち士大夫の道を學ぶ者が、藝術の安賣りさして眞價を毀傷するとは慨はしい。尤も僕が濱町の尊宅に訪問した時、細君は「主人(ヤド)は二階で仕事をしてをります」と云つた。

「成る程二階へ上つて見ると、君は手拭で片襷をして畫を描いてゐた。まるで傘屋の職人

見たやうな風だ。藝術を仕事と云ふ細君も細君なら、片襷で机上に向ふ君も君だ。今少し高い見識を以て藝術に對して貰ひたい。そんな卑しい根性で畫を描かれては、大に迷惑する。若しそれが出來ずば、臺所に俎板があるから、ケツマづいて自殺した方が良い」

と、眞向から浴せかけたので、流石、强情で通つた白龍は、一言も爭ふことなくして、辭去して終つた。こんなことを無遠慮に、隱さず包まず、ドシ〳〵云ふ所に、草雲先生の面目が躍如としてをると共に、忍耐自重して一言も爭はない所に、白龍の謙遜的、人となりが見えて面白い。こゝに二人の性格が、立派に反映してをる。これが自らその繪畫に表はれて、二人の好い對照となつてをる。

書畫會が盛大を極めて無事に濟んだ。その半月も經てから、聊か謝禮の意味で、勝重が白石山房へ來た。その揚句、久しぶりに町へ飲みに行ふと云ふことになつて、二人は連立つて出かけた。この兩三年、門から外へ出たことのない先生が、珍らしくも出かけたのは已に午後一時頃であつた。夕方には歸つて來られるだらうと思つたに歸つて來ない。早や

夜になつた。もう歸つて來るだらうと思つたに、まだ歸らない。心配しつゝ待つてゐるが頓と姿が見えない。それなら、近い所だからお迎ひにやれば好いのだが、その頃は、又どうしたことか、平生五六人はゐた女中が、いろ〳〵な用事で留守になつて、今晩は唯一人きり、それに男として池田一人、都合二人きりなので、迎ひに出る事も出來ない。如何に元氣な先生でも、七十六歳の老人だ、どんなことがないとも限らないと、大に氣を揉んでゐた。歸へれば直ぐ茶を飲まれるので、茶釜はシャン〳〵とたぎるほど沸かして居る。

餘り待ちくたびれて、茶目の池田は、不圖、いたづらを考へて、獨りで莞爾として笑つた。それは鹽の空笊に酒菰を着せて、好い蓑龜のやうに作り、これに荒繩の長いのを結び付けて、これを公園の丘からここへ來る道端に、一本の大きな老松がある。先生は必ずこの路を通つて來るのだ。この老松に大きなウロがある。その前へこの蓑龜を伏せて、繩を躑躅の生ひ茂つた中へ引込み、チャラ〳〵雪駄の音がしたら、早速、裏木戸から飛び出して行く。この蓑龜を見た先生は、屹度びつくりして藜の杖で、つつくに違ひない。つついた時、その蠅を手繰つて、一つおどしてやらうと云ふ惡戲だ。と謀んだので、早速物置で

それを作り、無事に目的通り一本松の下へ伏せて來た。早くその成功が見たさに、餘計に歸りが待遠しい。

頃は十月初旬、夜は靜かにして秋氣天に滿ち、月は高く冴えて白露、金風草葉の陰には唧々とすだく虫、實に好い夜だ。この清寂を破つて、忽ち雪駄の音が聽えて來た、と思ふと、

「僧は敲く月下の門」

と、朗々と良い聲で詩を吟じて來る。

「さア來た！」

と池田は飛び出した。蹶躅の中に身を潜めつゝ樣子如何にと見てあれば、果せる哉、びつくりした先生は、それでも落付いて、杖でコツ〳〵つつく、時分は好しと、スーと繩を引く、先生は立止つた。今度は引いた繩を緩めてやつた。復た杖で蓑龜をつつきさうだ。同じことを双方で二三度繰返すと、蓑龜は遂に池田の手近迄引寄せられた。すると先生は身を潜めて蹶躅を掻き分けた。見附られては一大事！　四ツン這になつて逃げ込み、裏木戸

からこッそり歸つて、何喰はぬ顏で控へてゐる。やがて、

「今歸つたよ」

と大聲で正門を敲いたので、

「お歸りなさい」

と、飛んで行つて門を開けた。先生は料理の折を下げて、千鳥足で而も上機嫌だ。座敷へ上るや否や、

「おゝ好く茶が沸いて居る、早速、一杯入れて貰ふか……つひ夫れから夫れと飲み歩いて、遲くなつた。その代り料理は全部、足下に土產だ」

と氣前好く與へられたので、

「これは〳〵！　早速頂戴しませう」

と、ムシャ〳〵食ひ出した。

先生は忽ち思ひ出したやうに、

「世には不思議なものが居る。今、俺が一本松の前まで來ると、六尺もある蓑龜が、大地

を這摺つてゐたから、杖で突いてやらうと思つたら、なか〳〵突けない」
と、さも誠しやかに云はれるので、池田は素知らぬ顔で、
「へえ？　そんなものが居るでしようか？」
とシラを切ると、先生は、いよ〳〵澄して、
「所がそいつが狸の悪戯で、俺の家の裏木戸へ逃込んだ」
と云ふから、池田は、
「戯談でしよう、まさか、そんな馬鹿氣たことがあるものですか」
と云ひ切らぬ内、
「イヤ實際だ、現在その狸の小僧奴、俺の前で料理を食つてをる！」
と、度胸を拔いた。池田も失策つた、已に見破られたと知つたか、
「悪う御座いました」
と謝る氣にもなれず、まだ落付いて、
「もうやがて二時ですよ、昔なら草木も眠る丑満つ時です……全體、文人は、志大く膽が

小くなければならぬ。貴下は畵家よりは、一層、軍人の方が良かつたのです」
と云ふと、大きな聲で、
「馬鹿野郎！　夫れは俺が足下に云つた口上だ」
と云ひながら、飲みかけた茶を吹き出して、から〳〵と笑つて、更に一言も小言を云はれなかつた。
怒らなかつたのも道理、これより先凡そ四ヶ月、池田は夜芝居から二時頃に歸つて來る
と、一本松のウロの中から、朱鞘の長刀を手挿み、鳩羽鼠の羽二重の紋附に、雪駄履の尻
端折り、グッとした頬冠りの下から白髯か鬱々として居る、逞ましい風采で、イキなり
「待て！」
と呼留めながら、ダン平を目の前へ突付けた。池田もさる者、一時はギョッとしたが、直
ぐそれが先生と分つたので、ビクともせず、ダン平を突出した手首を、ギュッと握り、
「馬鹿な眞似をするな、乞食芝居の定九郎の方か、モッと凄い」
と云ふと、これは失策つたと思つた先生

「草木も眠る丑滿つ時で」
云々は、その時、先生が池田に云つた言葉である。又
「文人は志大きく」
云々も亦先生の言葉だ。それを今晩はあべこべに池田の方から云つたのだ。これが失敗の腹癒せと共に、この間の復讐である。それと知つた先生は、更にそれを咎めるどころか、堪えられぬおかしさに、から〳〵と笑はれた。
この老人に、若い者のやうな惡戯をやる無邪氣がある。こゝに先生の鬼をも挫ぐやうな勇氣があるのである。
復讐については、少年時代に面白い話がある。あの頑固なむづかしいやうな先生も、幼少の頃はなか〳〵の愛嬌者で、當時、足利藩の隱居大殿樣が大變可愛がられて、御守役として附添を命ぜられたが、その大殿樣が亦一寸變つた人で、入浴の時、お相手として、賴輔の草雲先生が大殿樣の背中を洗ひ、こん度は自分が一風呂浴びやうと、浴槽に片足入れると、下つてゐる可愛い伜を、大殿樣は片手をズッと伸ばして夫れを握り、

「賴輔、茄子が實て居るぞ」
とからかはれた。浸つて漸く賴輔が出ると、大殿樣が代つて入らうとして、浴槽を跨ぎかけられると、賴輔は後から手を伸ばし、大殿樣のブラリと下つて居る一物を輕く摑み、
「御隱居樣、大きな南瓜が下つてをります」
と仕返しをしたので、隱居も怒る譯にも行かず、から〳〵と笑ひながら、
「この小僧、仇討を立ち所に仕遂げたのふ」
と仰せられ、敢てその不行儀を咎められず、却て一層可愛がられ、お忍びの折なども、お供は必ず賴輔であつたと云ふ。
この御隱居樣、妙な癖があつて、往來を歩き乍ら、自分の鼻を指頭で抓み、直立して反り身となられ、自ら
「みん〳〵みん」
と、獨語するかと思ふと、五六歩速足で前方へ驅け出し、又急に立止つて、同じことを繰り返すのであるが、これを賴輔が覺えて、鼻を抓んで、

「みん〳〵みん」
とやつて見せたのを、隱居樣が見られて、
「小僧、覺えたか」
とお仰つて興がらせられたるを、先生が昔を偲びつゝ醉餘などに折々話なされた。

五十一　無邪氣な事ども

或る時、何を考へられたのか、支那に關する精算をすると云つて、澤山ある燒箸を折つて、此方が八圓、此方が五圓と、折つた箸を疊の上に列べて勘定をしてをる。
熱心に何度も〳〵繰返してやつてゐるが、どうも勘定が合はぬ、合はぬも道理、折つた箸に、五圓とも八圓とも記しがないのだから、結局、分らなくなる。そこへ持つて來て算盤の嫌いな先生だ、計算が出來ぬのが當り前である。それを平氣で、何度も〳〵繰返してゐるあたり、如何にも子供らしい。
餘りにおかしいので、書生が見かねて、

「それではたゞ時間潰しで、纏りのつく譯がありません」
と云つたら
「それなら足下、やつて見よ」
と、漸く匙を投げられた。
白石山房の庭に、五六株の芭蕉があつて、或る夏、珍らしくも花が咲いた。何處から聽いて來たのか、芭蕉の花の露は蜂蜜以上に甘いと云ふので、朝早く起きて、まだ蜂や蚋が夜露で羽根が濡れて自由に飛べぬうちに、吸ふに限ると、朝早く起きて吸つた。吸つて見ると、成る程、甘露〳〵！と、毎朝吸はうとされた。そこで池田に、朝早く起してくれと頼まれたので、池田も一生懸命で、毎朝早く起きて、
「先生々々！」
と起した。四五日は、起すと直ぐ床から出て、庭へ出て花の露を吸はれた。
或る朝、どうしたのか、いくら起しても、どうしても起きない。その内に太陽がズンズン昇つて終つた。やッと起きた先生は、これはとばかりに驚いて、急いて芭蕉の下へ驅け

付けて、例の通り花の露を甘さうに吸つてゐると、羽根が燥いて自由に飛べる蜂公は、我が食料の盗人よと怒つたのか、ブーンと飛んで來たかと思ふと、ハッと云ふ間もあらばこそ、先生の頰べたを、遠慮もなくチクリと刺した。思はぬ襲撃に、さすが英雄の先生も、

「あ痛い！」

と叫ばざるを得なかつた。

「この畜生奴！」

と、平手でぴしやりと拍つた。　蜂も危急存亡の場合だ、それ位のことで敗けてはならぬ打つたその手を、復たチクリと刺した。

「あ痛い！〳〵！　誰か早く來てくれ」

と、應援を呼んだ。見てゐる間に、顏は水袋のやうにハレ上つた。

それに懲り〳〵で、それからは毎日、昨日と打つて變つて、

「あんなもの吸うものぢやない」

と、それからは、すッかり吸はぬことになつた。まるで子供だ。

或る夏、暑いと云つて、南窓の障子を開け放つて畫を描いてゐると、机上に蠅の來るのを氣にして、竹の皮へ鳥モチを引展して置いてあつた。忽ち一陣の風が颯と吹いて來たかと思ふと、あれ！　と云ふ間もあらばこそ、そのモチの竹皮は、吹き上げられて宙に飛んだ。と思ふ間に、バタッと落ちて來たが、落ちるも落ちたり、一心に畫筆を練つてをられた先生の所へ來て、その鬱々たる頤髯に吹き付けた。さア大變！　鳥モチが髯に付いたのである。取らんと欲しても容易に取れぬ。あらゆる苦心の果、漸く取つたが肝腎な髯にモチが付いてゐる。それを綺麗に掃除するために、

「これ燈油を持つて來い」の

「それ良い石鹼を持つて來い」

と、家中の大騒動。

その翌日から俄に髯を束ねて、チョン髷に結び、頤の下にブラ下げた。丁度髷が二つある譯で、近來の奇談であつた。

五十二　金平糖箱の紛失

明治二十三年、先生が七十六歳、帝室技藝員を拜命された時、宮内省から百圓の御下賜金があつた。

「これは同じ金でも尊い金であるから、大切にせねばならぬ」

と、別に相談もせず、一人で何處かへ秘つた。

その時は大事だと考へられたが、兎角、無頓着な先生、何時か早やその金の秘ひ場を忘れて終つた。

「何處へやつたか知ら？」

と、心配しだした。女中や門人を呼んで、

「金平糖の空箱が机の上にあつたが、知らぬか？」

と、百圓のことは一言も云はないで聞く。

「金平糖の空箱？」

と、何れも不思議に堪へぬが、元より知らう筈はない。誰も

「知りませぬ〳〵」

と返辭するのみである。それを毎日〳〵同じやうに問はれる、こちらは又同じやうに返辭する。あまりのことに少々うるさくなつて來た。

「一體その金平糖の空箱には、何が這入つてゐるのです？」

と問ふても、更にそれには答へがない。

凡そ二十日間もそんなことを繰返してゐたが、或る朝、まだ夜の明け切らぬうちに、池田の寢所へこッそりやつて來て、小さい聲で、

「一寸、要談があるから、女中共に知れぬやうに、俺の所まで來てくれ」

と云はるゝので、池田は何事かと怪しみつゝ從いて行くと、

「實は御下賜金が紛失したのであるが、昨夜、易をたてゝ見たら、それは男が盜んだ。盜んだその男はまだ門を出ないと云ふのであるが、どうだらう」

と云ふ。池田もこれには一寸驚いた。

と云ふのは、當時、奉公人は、女中が二人で、男と云へば先生と池田のみである。男が盗んだと云へば、先生か池田が取つたことになる。と云つて自分の金を自分で盗む馬鹿なことはない。そうすれば結局、池田が盗んだことになるのである。若しそうとすれば、本人を前に呼んで、正直に聞くのもおかしい。そう云ふ突飛なことを平氣で云ふのが、先生の持前であるから、池田も別段意に介せない。唯平生、先生の坐つてゐる後に戸棚があつて、何でもそこへ入れる習慣があるから、大方こゝへ入れたのを忘れてゐるだらうと思つたから、池田がその戸棚を探さうとすると、先生は、

「その戸棚は、己に俺が幾度も探したのに無いのだから、この中には決して無い、探すに及ばぬ」

と強情を張つて、いつかな肯かない、池田はいよ〳〵こゝが怪しいと思つたが、先生はドウしても探させない。

一體、この家は、近頃新築したばかりで、椽の下には鉋屑が一ぱい散らばつて居る。そこで先生は池田に、

「椽の下へ這入つて探して見てくれ」

と云はれた。が、池田は甚だ不平だ。池田の信ずる戸棚を、強情張つて探させないで、嫌疑をかくる餘地のない椽の下とは何事だ。とは云つてもそのまゝにはして置けぬ、一時の氣休めのために、椽の下へ這入つて探すことにした。池田もさる者、這入りかけて、先生に念を押した。

「金平糖の空箱は、ムキ出しであるか、それとも何かで包んであるか」

と問ふた。

「何も包んでない、ムキ出しだ」

と先生は直ぐ答へられた。

「宜しい」

と池田は、椽の下へ這入つた、申譯のために其處此處と探したが、元より鉋屑ばかりで何物も無い、好い加減で止めて終つた。

その夜、池田が机邊に靜に勉強してゐる、夜は深々と更けて十二時頃にもなつた。忽ち

ガサリと物置の戸が開いた。勿論、泥棒ではない。何事かを案じつゝこッそり湯殿の流場に、丁度好い戸の節穴がある。そこからぢつと眼を据えて見てあれば、こはそも何事ぞ、先生が竿の先へ鎌を括りつけて居られる、何するだらう？　と考へた。扨は！　と思はず手を拍つた。あれで椽の下をもウ一遍探させるのだ。貪惜みの強い、強情な先生は、どこまでも椽の下を主張するのだ。が、屹度、例の戸棚に有つたに違ひない、それが漸く氣が付いたのだ、體裁が悪いから、好い加減な策を遣るのだと合點した。ア分つた。捜し出した金を、も一遍椽の下へ入れて、あの竿で、俺に探させて、俺の云ふ通りだ

「そら見ろ」

と、小言を云ふつもりだ、迂濶にこの小細工には乗らぬぞと、池田は獨り破顔微笑した。彼れや此れやと考へ通して、その夜は遂に眠らなかつた。

スルト先生が、早くも

「池田々々！」

と起しに來た。池田は起きて、先生に從いて、新築の家の玄關の所へ行つた。そこには、

昨夜、苦心して作られた竿の尻が、スッと出てゐる。果然、その竿で椽の下を探せと云ふ池田は心中で笑はざるを得なかつた。が、どこまでも眞面目で絶對に拒んだ。仕樣がないものだから、先生自身がその竿を取つて、椽の下を搔き廻した、果せる哉、ガタリ何か〻引つ掛つて來た。云ふまでもなく、それは紙で包んだ金平糖箱である。それが出るや否や

「それ見ろ」

と先生が云ひ出さぬ先に、池田が機先を制して却て反問した。

「おかしいですな。裸躰のまゝぢやと仰しやつた箱が、新聞紙に包まれてゐるのが第一怪しい。而もその新聞が、漸く一昨日の朝日新聞である。その金平糖箱の失つたのは、己に一ヶ月も前ぢやありませんか。いよ〳〵おかしい……分つた、これは伯父さんが昨夜のうちに、態と椽の下へ入れたものに違ひない」

と、意地悪く圖星を指されたので、先生もこれはと參つて終ひ、俄に改つて、

「實は戸棚に置忘れたのを、足下に云はれて氣が付いたのだが、一旦、無いと強情を通した手前、今更有つたとも云へぬので、何處までも椽の下から出たやうに云ひ張るつもり

であつた……何しろ失つた金が出て來た、こんな有難いことはない、頂け〳〵」
と云はれたが、池田もなか〳〵利かぬ。頑として應じないで、
「それはなりませぬ。僕は盜みの汚名を蒙り、あなたの金が出たからとて何も頂く必要はない。あなたこそ頂くが好い、失くなつた金が出て來て、つまり二重に手に入つた譯である……あなたも隨分、人が惡い、戸棚から出たものを、椽の下に入れて、それを誠のやうに云ひ張らうとしても駄目ですよ、天網恢々疎にして漏さずで、あなたが昨夜遲く物置で仕事したことを私はチャンと知つてをる。……濟んだことだから仕方がないが、毎日、氣を揉ませた女中達こそ氣の毒だ、出て來たと云ふなら、何とか安心させてやつて下さい」
と、大に不平を列べたので、
「それなら書生女中達に、五圓宛もやらう」
と、流石に我を折つた揚句、恭しく自分で三四度も頂いた。實に罪がない。

五十三　觀音樣の行衛

白石山房の二階に、白梅檀で彫つた一寸八分程の觀音像があつた。それはもと林和一氏が所藏せし物を、草雲先生が喝仰の餘り强ひて請ひ受けたものである。先生は自分の深交ある知人から、必ず何か一物を請ひ受けて、永久の記念とする道樂と云ふか、趣味と云ふかゞあつた。この像も蓋しこの理由であるが、これがため先生の觀音信仰は一層の進境を見て、敬虔になつた。

この林和一と云ふ人は、倅格太郎の友人で、彰義隊の一人であつたが、上野の敗戰後、稱福寺の床下に隱れた七人組の一人で、維新史に光彩を放つ人である。氣慨あり力量もあつて、今の小笠原島はこの人の發見にかゝるものだと云ふ、確に明治の先覺者であるは云ふまでもないので、明治中興までは、東京組合代言人（今の辯護士）中でも錚々たる人である。

この歴史あり且つ信仰ある尊い觀音樣は、草雲先生の所へ來て、一層丁寧に供養され、

先生も格別大事にしてをられたが、どうしたのか、何時の間にやら誰がしたのか、鼻のあたりに大へん傷が出來て、頗る端嚴微妙の相好を傷けたので、滅多に小事に怒つたことのない先生が、こればかりは大に怒つてブン〳〵してゐた。が、元より誰の仕業か、頓と分らなかつた。

その傷付けたところへ、今度は、この觀音像が何處かへ紛失して終つた。さァ大變！見えなくなつたと云つては實に困る、誰が失くした？　と騒いだが、元より盗賊の這入つた樣子もなし、誰も持つて行きさうもなし、又何處へ片付けると云ふこともないので、いよ〳〵怪しくなつた。

今度こそは先生も本當に怒つて、お留守のお厨子へ朝晩に參詣しては、ブリ〳〵怒つてゐた。それから二三日經つてからである。不圖、池田に向つて

「昨晩、觀音樣が夢に現はれて、我が鼻に傷付けた者は分つてゐる。が、その男が、その恐ろしい實を隱すために、今度は我が像をも盗んで、裏の小川へ投げ捨てた。それは若い男であるが、今に罰が當つて、足に腫れ物が出來る、それが當の罪人である。」

とのお告げであつたと云はれて、池田は大に憤慨せざるを得なかつた。それではまるで池田が、その罪人かの如き云ひ廻しである。池田も甚だ癪に觸つたので、

「宜しい、分りました。それでは今度、萬一、あの觀音樣が何處からか出て來た時は、私はその觀音樣を踏み潰して終ひます……何故ッて？罪もない者に、罪を着せるやうな御告げをする觀音樣は、有れば有る程人が迷惑するからです」

と云つた。亂暴なやうでも理窟に合つてゐるので、先生も何とも云はれなかつた。

その夏、池田が一人、机場に勉強してゐると、西の物置で、何かガサ〳〵音がするので何だかと覗いて見ると、先生が一人で一心に掃除をしてをられる、池田も默つて居れぬので、ノコ〳〵出かけて手傳ふつもりでそこまで行くと、入口の敷居の上に、一つの小い紙包の載つてゐるのが、不圖、目に入つた。何氣なく手に取つて見ると、これはしたり！失つた大切な觀音樣が、傷だらけの鼻を向き出しにして御座る。これは！と驚きつゝ、ソトこッそり袂へ入れた。それを、一心に掃除してをられた先生が、氣付かれたやうである

「俺は運動のために、物好きにやつて居るのだから、捨てゝ置いてくれ、それにモウ暑く

なつて仕様がないから、止めよう、止めて苦い茶でも一ぱい飲まう……湯でも沸してくれ」

と云はるゝまゝに、池田は座敷へ戻つてお茶の仕度をしてゐた。先生も直ぐ戻られて、池田と二人、相對してお茶を飲んで居られると、先生は不圖、思ひ出したやうに、

「先刻、西の物置の敷居の上へ、小い紙包を置いたが、足下は氣が付かなかつたか」

と來た。池田は、

「さア高田の馬場が近寄つた、仇を討つはこの時だ！」

とばかりに、素知らぬ顏して、

「え、別段何も氣が付かなかつたが……この紙包の中には、何か大切な品でも這入つてゐたのですか」

と、先づ一刀を眞向に浴せた。先生の受太刀は、稍や、しどろもどろとなつた。

「ウン敢て大切と云ふほどの物ぢやない」

とまで云つたが、後は云はれぬ。池田は胸がドキ〳〵してぢッとして居れぬので、ヂリヂ

リと近寄つたかと思ふと、袂から最前の紙包をそこへ出した。驚きの眼を瞬つて居られる先生に、

「お尋ねになる紙包と云ふは、これではありませんか」

と、大上段に構へた。先生の太刀先はいよ〳〵鈍つた。

「ウンこれだ〳〵！」

と早や紙包を手に取らうとされたが、どッこいその手に桑名の燒蛤と、紙包を持てゐた手を引込めた。そうして靜に先生に向ひ、

「觀音樣が出て來て先づ一安心しました。出て來た上は、お約束に從つて、踏み潰して終ひます」

と、心にもない虛勢を張ると、

「否、觀音樣から御告げがあつた譯ではない、あれは俺が瀨踏みに云つたゞけで、觀音樣は御存じがないので、何も罪はないのだから、踏み潰すことは止めてくれ、若しそんなことをされては、折角記念にくれた林に對して義理が濟まぬ」

と、面、小手取つて先生の敗北と決つた。

五十四　餅の盗喰ひ

正月の餘つた餅を、網の袋へ入れて、二階の天井裏へ、毎年、後から〳〵と吊るすので天井裏は、葡萄棚のやうに、網袋の鈴なりである。それを何時も、小さかしい梁上の君子が、人知れず盗み何時の間にやら、網中無一物となつて終つた。

人を疑ふことに、極めて頭腦の働きの好い先生がそれを見出し、鼠でも引いたやうに、一ッ二ッと盗み出し、とう〳〵網だけを殘して、

「あれだけ詰つてゐた餅を、みんな平げて終つた頭の黑い鼠は、まことに意地が汚ない」と何のことはない、鼠に見せかけて、その實、自分等が盗喰ひしたのであると、云はぬばかりの口吻であるので、池田も少々ムッとしたので、

「叔父さん、それは可哀相です、餅なら臺所に黴の生える程澤山あるから、何も苦しんで二階へまで行く必要はない。奉公人達が心配しますから、左樣なことは云はないやうに

願ひます」

と、下から桶に入づた餅の餘りを見せた。この活ける證據には、流石の先生も參つた。フンと鼻で笑つてをられた。無くなつた餅が惜くて云ふのではない、何とか文句が云つて見たさに云ふのだ。罪のない愛嬌である。

五十五　來客の人々

何處も同じだが、白石山房でも、來客の多いのには實に閉口した。先づ畫の依頼に來る催促に來る、書畫の鑑定を請ふ者、又は無駄話に來る閑人、それを一々相手にして全く筆執る暇もなく、畫を描く自分の時間を犧牲にして、人の應接のために使はるゝ始末で、先生も、

「五月蠅い〳〵」

と口癖に云つてをられた。逢ふ人毎に

「あゝ五月蠅いことだ」

「今朝から丁度、君で二十人目だよ、畫も何も描いて居る暇がない」
と、迷惑さうに云ひつゝも、必ず會はれる、未だ嘗て一人も拒絶されたことはない。だから、無遠慮に云はれても、それが先生のざッくばらんの面白い所と知つて居る客の方でも決してそれを氣に止めないで、矢張り人が遣つて來る。そして先生の聲名が高くなるほど來訪者が多い譯だ。或る時は
「三十分より長座御無用」と貼札をしたが、一向きゝ目がないので軈て止めて終つた。
山猿の來ては濁すや苔清水
とは、先生がこの頃の句であつた。
殊にその頃では、僞文士や乞食遊歴者が來ては、畫の無心を云ふ、或は口から出任せの悲慘な話に憐れみを訴へる者などが、大家の玄關へ遣つて來て仕樣がない。斯る厄介者を上手にあしらひ、時には追拂ふのが、玄關子の一仕事であつた。
所が先生は、運動と稱して、一日一回づゝ庭内を杖を曳いて逍遙されることになつてゐた。その逍遙中に、例の僞文士などに出ッくはすことがある。或る時、その僞文士が、先

生を庭で見出して、頻に畫の惠與をねだつてゐて、先生もほと〳〵困り果てゝ居られた。が、その男の語調がどうやら、相手の草雲先生なることを知らぬらしい、それと合點した先生、直ぐ氣轉をきかせて、
「草雲は病氣で、東京の病院へ行つて居る。留守のことだから自分には取計ひが出來兼ねます」
と、白を切ると、僞文士は、
「この前、お伺ひした時、先生に面會しましたが、確かあなたのやうに覺えて居ります」
と云へば、先生ます〳〵呆れた樣子で、空とぼけて、
「自分と兄とは少しも違つた所がないと云ふので、皆さんから見違へられて困つて居ります。兄は眉毛の中に黑子がないが、自分はこんな目立つやうな黑子が、而も眉毛の中にあつて、自分と兄とを見分ける目標ださうです……兄が歸り次第申聞けるから、又その時間にゐらつしやい」
で、幸ひに河内山宗俊が北村大膳に見付けらるゝの大難を逃れて、うまく煙に卷いて追

拂つて終つた。後見送つて、

「ウヽム、あの鈍物奴が、あゝ甘くしてやつた」

と一人で大喜び、

「又次のお替りの來ぬうちに、書室へ逃込んだ」

と、獨語ちつゝ二階へ上つて行かれたのは、流石に大傑作であつた。

或る時、年の頃八十とも覺しき、六尺豐かな大坊主が、草鞋履で兩掛を肩にして、玄關に突立ち、

「お頼の申うす」

と案内を請ふので、

「ドーレ」

と應接に出ると、懐中から添書を出して、

「私は豐後の詩人で百石と申すものです、どうぞ先生へお渡しを願ひます」

と云ふ。その由を取次いだ。先生がその添書を開封されると、それは伯爵勝海舟先生から

のものであつたので、直ぐ二階へ案内した。

そこで先生が百石に向つて、

「勝伯から書いた物を貰つて來たと云ふが、それを見せなさい」

と云へば、肩にしてゐる油紙の中から半折を出して渡した。見ると、

何事もぴんころがしの世なりけり

と、上の句だけ海舟先生が書いてゐて、下の句の入る程餘白があいてゐる。先生は、暫らく首を捻つてゐられたが、軈てその餘白へ、笊の伏せたのを描き、その下へ、

馬鹿したが勝ち狐ちよぼ一

と入れられた。それは、この人は四十まで故郷に居て、

「ぴんころがし」渡世の遊人であつた所、村の有力家の倅で、僅十三歳の小僧に、

「ぢいや、學問をしろ〳〵」

と云はれた。別にやりたいとも思はなかつたが、出入の小旦那の云ふことだから、始めの内はお世辭に、その小旦那について厭や〳〵習つて見た、それが動機となつて、學問が面

白くなり、世に云ふ四十の手習ひを一心に續けた。彼此兩三年も經つと、小旦那は東京へ出て終つた。百石はます〳〵獨學を續けてゐたが、思ふ一心で學問が自ら上達して、百石と云ふ號まで付け、兎に角、田舍詩人にまで卒業したので、何年ぶりか、例の恩人の小旦那を訪問のために、九州下んだりから態々上京して、報知新聞社に訪ぬると、それは〳〵大さう喜んで、

「折角、來たのだから、勝海舟先生を訪ねて、國への土產にせよ」

と紹介してくれた。その添書に、

「ぴんころがし」渡世の遊人から詩人になつたことが細かに書いてあつたので、頓才に富んだ海舟先生は、卽座に、前の句を書かれたのであつた。

その樣子を又海舟先生から紹介して來たので、先生はそれを請うて見られて、海舟の言葉に任せて、下の句を作つて結ばれたのである。こゝに初めて完結したので、天下の兩奇人が、期せずして合作をした、風流淸爽のものが出來上つた。

その小旦那と云ふは、驚く勿れ、當時、佛蘭西小說の飜譯者として、盛名嘖々として、

人氣を一身にあつめてゐた思軒居士森田文藏氏であつた。世の中は、實に面白いものである。

紹介の如何に拘はらず、初對面の人でも、見る影もない勞働者でも、訪問者に對しては決して面會を拒絕したことはない、必ず應待された。如何にも眞面目な所があつた。それがため人一倍忙がしかつた。

五十六　旅文人の狼藉

或る夏の日中である。先生と池田とが、茶を飲みながら、凉しい庭を眺めて浮世話をして居ると、年の頃六十ほどの老爺（おやじ）が鐵御納戸の絽羽織に、輕るさうな兩掛を肩にして、脚絆草鞋に足を固め、玄關に立つたが來意を述べず、自分の名を名乘らず、いきなり懷中から五十錢の小札一枚取出し、そこに居る池田に向つて、

「これで町から牛肉を買て來てくれ、飲みながら大に話をしよう」

と云つた。この樣子を先き程から見てゐられた先生、ムカ〳〵ッとされたかと思ふと、ッ

カ〳〵ッと立つて來て、いきなり大喝一聲、
「この馬鹿野郎！無禮千萬な老ひぼれ奴、自分の名前も名乘らず、來意も告げず、いきなり牛肉を買つて來いとは何事だ。飲みながら話さうとは何だ、誰の許を得て、誰と飲むつもりだ。それに勝手に牛肉を買つて來いとは何だ。これを誰と思ふ。これは俺の甥で、俺の看護のために東京から呼び寄せて居るので、一刻たりとも手元から離すことは出來ぬのだ、貴樣などの買物歩きさせるために來て居るのではない。さァ歸れ！〳〵！失敬な」
と怒鳴り始めた、が、この老爺も少し酩酊氣分でゐたが、ギョロッとした眼を開き、
「ム、俺の名か、俺は竹巖と云ふものだ。俺は竹田先生の高弟で、來意なぞは云はずと分つてゐる。文人墨客は酒が交際の始である。肴がなければ飲めぬから牛肉を買つて來いと命ずるのだ。貴樣の甥でも何でも好い。用を足すための小僧であらう、一時、足下の手許を離れたとて、俺と足下と飲むでゐる間に、牛肉は買つて來れる。朋あり遠方より來る、樂しからずやだ。愚圖々々云はずに、早く仕度せい」

と、大見幕で怒鳴つてゐる間に、早や草鞋を脫ぎ始めた。
いよ〳〵以て怒り出した先生は、
「ム、」と云ひさま、いきなりこの老爺の襟首を、痛いと云ふほど引立て、
「死損ないの耄碌老爺奴、庭內で行き倒れにでもなつては大迷惑だ、竹田の門人でも何でも構はぬ、さッさと出て行け……さァどうだ、行くか行かぬか」
と、猫の子を吊したやうに鋭く引立てると、老爺は足元騷がしくも、よろめき乍らも、なか〳〵敗けてゐないで、
「何だと、評判ほどにもない、話せぬ奴だ。行けと云はぬでも、こんな處には居るのが厭やだ」
と、甲論乙駁、大きな聲で互に怒鳴り合つてゐた。一時はドウなることかと心配したが、誠心隙以來、腕に覺えのある先生、滅多のことはなからうと思つたが、相手が醉ッぱらひの見ず知らずの男、どんな亂暴をせぬにも限らぬと氣使つたほどもなく、先生の力に屁子垂れて、スゴ〳〵と出て行つた。

五十七　禪僧と牧師

白石山房は恰も人物博覽會の如く、變つた人が時々來る。その來る人々を、先生は應用無礙に應對して、常に一枚下に見て、決して敗けることが嫌ひであつた。

或る時には珍らしくも禪宗坊さんが來て、大に問答をやつたことがあつた。惜しいことにその坊さんの名を聽き漏したことは、返す〳〵も殘念である。白石山房に禪宗の問答、これは疾くに無くてはならぬ愛嬌であつたが、それが今日まで問答に來る和尙がなかつて一種の寂寥であつたが、今日その人のあつたことは愉快である。

雪がチラ〳〵降り出した冬の日のことである。六十恰好の老僧が、似合はしい紫の法衣を着て、供の者に兩掛をかつがせてゐた所から見れば、相當の寺の和尙であつたらう。名は知らぬが、遠い信州の和尙で、何事かあつて來た序に、訪問したとの口上であつた。始めの內は大層な見識で面白い禪の講釋をやつてゐたが、到頭、終ひには本音を吐いて

「お墨の付いたものなら何でも好いから、頂きたい」

と、常套手段のねだりをしたので、それまで靜に聽いてゐた先生も

「又か」

と少し癪に觸つたので、

「墨の付いたものなら何でも好いと云ふなら、今目の前で描いてやらう」

と云ひつゝ、早くも筆を執つて、半紙へ後向きの達磨を描き、それに

不開化な昔の世とは違ふぞよ

此方向いて見な達磨さん

と賛を入れて與へられた。

坊さんは暫らく

「不開化な……」

と神妙に讀んでゐたが、軈て眉を逆立てゝ、さも不平らしく

「これでは、自分の說く所が、どうやら時世遲れのやうに聞えるがドウですか」

と問ふと、先生は無遠慮に、

「お説の通りだ」
と云はれる。坊さんはムッとして、
「人を馬鹿にした」
と云ふや、先生はます〳〵坊さんをからかつて、
「和尚、怒つたか。禪知識とも仰がれるものが、こんな事位に怒つてはいかぬ、怒ると腹の形が悪くなる、まア怒らないで、大に開化の達磨さんになつてくれ」
と、呵々と笑はれたので、坊さんも何時までも怒つて居れず、そこ〳〵に辭して行つた。
禪僧との問答は、先生の宗教的色彩で、白石山房には珍らしいが、宗教の次手にも一つ話したいことは、これは少々毛色の變つたキリスト教との話である。禪宗とキリスト教、その對照が面白い。
足利のキリスト教會の牧師が、殆んど隔日位に根氣好く來ては、先生に、キリスト教になれと勸めに來た。初めのほどは先生も神妙に聽いてをられたが、度重なるに從つて、餘り五月蠅いので堪りかねて、

「君の熱心には敬服したが、キリスト教は不幸にして信ずることが出來ぬ。强いて俺の宗教觀を狂歌に作つたから御參考に供しやう」と云ひながら、
この年でまさか宗旨もかへられじ
ヤソより一層クソがましなめ
と、三十一文字を書いて、
「まアこれだよ」
とから〳〵と笑ひつゝ示された。牧師はこれを見て何とも云はず、スゴ〳〵と歸つて行つた。が、この狂歌が、三下半の離緣狀となつて、牧師はそれきり、緣なき衆生と思つたのか、再び白石山房の門を潛らなかつた。

五十八　春畫の愛嬌

京橋の彌左衛門町に經濟雜誌社と云ふのがあつて、その社長が、後に博士になつた鼎軒田口宇吉氏であることは、苟も明治の思想史、經濟史を知つた者は、能く覺えてゐる筈である

こゆ鼎軒先生は、伴某と云ふ人と二人で、兩毛鐵道の開設について大に運動する所があつた上に、その線路が、白石山房の庭の眞中を通つて、正に白石山房を兩斷するので、その交渉がむづかしく、ために度々來られたので大へん懇意になつた。

所がこの二人は、共に熱心なクリスチャンで、兎角、話が眞面目過ぎて、鐵を嚙むやうな堅いことばかりなので、意地の悪い、變つたことの好きな、時どき横紙破りをやる先生は、からかひ半分に、

「今日は一つ君等に面白いものを見せてやらう」

と云ひつゝ、極めて秘藏の、應擧が描いた極密の春畫があつたのを、事もあらうに、何の隱す所もなくそれを出して、

「さァ御覽」

と云はれた。眞面目を生命とするかの如き二人は、忽ちムッとして烈火の如く怒り出し、

「先生、失禮ぢやありませんか、何がために我々にこんなものを見せられるのですか、こんなものは、白晝、紳士として手に觸るゝさへ汚らはしい」

と、大童になつて反抗して來た。斯くと承知の先生、意地悪くカラ〳〵と笑つて、

「まァ〳〵そんなにムキになつて怒るものでない、まァ能く考へて見給へ、君等とても敢て木の股や岩の根から生れたのでなからう、矢張り御兩親があるのであらう……さァその御兩親は君等を生むに、果して如何なる行動をしたのか、汚はしいなど云ふが、矢張りこの春畫のやうな働きをしたのだ、そのお蔭で君等はこの世へ生れて來たのだ、有難いと思はねばならぬ。故にこれは笑つてニコ〳〵して見るべきもので、君等のやうにブン〳〵憤つて見るものではない、憤るがためにこれを見せたのではない」

と、飽までも冷靜に云はれるので、二人も初めてこれと氣が付いて、心機乍ち一轉してクス〳〵と笑ひ出して、面白く歸つて行つた。

その次に來た頃は、前とは打つて變つて先方から

「先生、今日は何か一層變つたものを見せて下さい」

と云つて來た。それを聽くや、先生はカラ〳〵と笑つて、

「到頭、感化されて終つたね、そう出られては、モウ興が薄い、見せる張合がないから止

めやう」

と、遂に見せられなかつた。

こゝに先生の性格が表はれてゐる。これこそ禪宗の憐兒忘醜の大慈悲心である。

五十九　雪見酒

「今日は久しぶりで風のない雪模樣で、隨分と降り積らうから、餘り積らぬうちに、七面鳥を一羽料理しろ」

と先生が云はれたので、

「ハイ」

と返辭しつゝ、茶村は早くも物置の鳥小屋に行つて、直ぐ料理して二階へ運んだ。

それから

「誰も來ないやうに門を鎖めて來い」

と命ぜらるゝまゝに、池田か門を閉めて來た。

三人は二階に車座になつて、その肉鍋に舌鼓打ちつゝ、三方を開け放し、雪見を始めてゐると、穴の穿くほど、茶村の顏を見て居られた先生が、何思ひ出したのか、池田に向つて

「貴公、稱福寺の陶村和尙を覺えて居るか」と聞かれるので、

「覺えて居る」と答へると、

「茶村と陶村和尙の顏と酷く似て居るぢやないか、瓜二つとはこのことだ。どちらも罪ない風流な顏つきだ、唯陶村は學問の素養もあり、詩も出來、珍らしく藥草には深い趣味を持てゐたが、茶村は何が趣味だ、勝手へ行て內證酒を傾ける位がせきの山だらう」

と、持前の批評を始められたので、池田も亦

「茶村の顏が誰かに似てゐる」

と思ひ、胸の中で物色して見たが、頓と思ひ當らなかつた所へ、今先生から云はれて、ハタと手を打つた。全く酷く似てゐた。

何を云はれても風馬牛の茶村は段々、酒の醉が廻つて來ると、元氣づいて、俄に眞裸躰

になり庭へ飛び降りた。かと思ふと、手際好く一尺五寸計りの雪達磨を作り、四角い盆に載せて來た。これは〳〵と驚いたが、これを見て居られた先生、紙片を取つて、

本來空なり唯此雪達磨

とやられた。雪達磨こそ誠に本來空である。物質的ばかりの本來空ではない、精神的にも先生は全く本來空で、常に何の蟠りもない。

これは七十八歳の秋十一月のことであつた。

六十　風呂と料理

先生は非常に潔癖家であつた。それで例の枕頭の七ッ道具の如く、清穢と云ふやうなことは頓と念頭にない。入浴の好きなのは潔癖家の特有であるが、先生も亦その數に漏れず至つて入浴が好きであつた。

自分の這入る風呂に、衞生だとて鹽を一俵、俵のまゝで投込み、

「只一夜で流して終ふは不經濟だ」

とあつて、その湯を七日も十日も沸し返しては、朝夕四五回も入浴する。それに鹽で忽ち釜の鐵錆がついて、湯は溝泥色になつて、臭氣粉々としてとても堪へ切れぬ。それでも先生は平氣なもので、出た後で、

「みんな、湯があいたから這入んな」

と云はれるが、若い女中達はとてもそんな湯にはよう這入らない。この湯のための第一の犠牲は女中達で、湯が換へられぬから外の風呂にと思つても、大事な娘だ、町へ浮か〳〵行くことは絶對に許されぬので、十日でも二十日でも我慢して湯に入ることが出來ぬ。それは先生も氣が付かぬらしい。これを平氣で居らるゝ所に、如何にも先生の超人間的の樣子が窺はれる。

そうかと思ふと又子供らしい所があつて、

「食つても食はないでも、膳の上が賑かなのが樂しみだ」

と云つて、大抵、三食とも七色位の料理を乘せるが常であつて、それも一品でも、朝の料理が晝の膳に載つたり、晝の料理が晩膳に載つたりしてゐると、忽ち大喝一聲、

「八十に近い老人が、筆一本で努めるのは何が樂しみであると思ふ、ツマリ食物より外にはない、俺は食物に八ヶ間數いから女中を澤山置いてあるのだ、餘り物で食て置く位なら何も苦るしんで働きはしない。」

と大こゞとだ。實際、食事には面倒な人で、澤山盛れば盛つたで、

「馬や牛でないから、この樣に盛るな」

と叱り、量が少なければ、

「質素にせよと誰が云つた、ある物ならモツと十分に盛れ」

と理窟を云ふ。萬一、椀と茶碗との置きやうがあべこべに、左膳にでもなつてゐようものなら忽ちクワツと怒り、池田を呼び付けて、

「左膳とは、武士が切腹する時に限る。俺に切腹でもさせる氣か、何故、も一度、足下が目を通さない」

と、乙にねぢれて大目玉を食はされよつた。

「俺は食物に八ヶ間しい」

と名乘るだけあつて、時折は途方もない食物を考へ出しては要求する。

山國と云ふほどではないが足利の田舍であるし、庭は廣いし樹木が多いので、毎年秋になると、庭内にある四本の栗の木に、山嵐しと云ふ動物のやうな、全身、恐ろしい刺だらけの栗の果が生る。一日一度の日課運動に出る先生の目に、忽ち止る。すると物好きに、杖で敲き落されるのだらう、痛さうな手つきでそれを拾つて來て、

「こんなに栗が實つて居るのだから、何とか考へて、思ひ付の變つた食物をこさへて喰ひたいが、一つ工夫して見てくれ……年を取れば、食物が樂しみの隨一だ」

と、仲の好い池田を呼んで要求される。あまり料理の通人でもないが、そう云はれて見れば何とか工夫して見ねばならぬ、敗けぬ氣の男だ、

「一つ考へて見ませう」

と工夫をする。

恰も作男が、折好く實の入つた枝豆を、畑から持つて來たのがあるのを幸ひ、まづ枝豆を茹でゝ皮を去り、次に栗を茹でゝ皮を剝き、右の二品を味噌と共に摺り交ぜて汁となし、

味淋と鰹節とで調味を施して、御飯の時にお膳に供へた。どうだかと心配してゐたが一口、吸つた先生、

「これは甘い」

と舌鼓を打ちつゝ、

「これは思ひ付の珍料理だ、夕飯もこの汁で食はせてくれ、」

との大滿足で、池田は大に面目を施した。えらく夫れが氣に入つて、凡そ三十日間もそれを吸はれた。

この栗の發見で味を占めた先生、こん度は庭の無果花が笑み割れてゐるのに氣が付き、それをもぎ取つて來て、

「皮を剝いて三盆砂糖で煮解かしてジャムを作つてくれ」

との要求、それも遣つて見ると存外味が好く、大に氣に入つて、これも亦日課に加へられた。

栗や無果花も無くなつて、先づこの料理の厄を免れたと思ふ頃、安蘇郡長が交迭したので新郡長が挨拶に、佐野から見えられた。それを好いこと幸ひにして、御馳走を待つてゐ

る先生は、無遠慮に、

「佐野は鰌が名物故少し送つて貰ひたい」

と頼まれた。郡長は却て絶好の機會と、早速、四斗樽に半分ほども送つて來た。

「これは細い處は汁や丸煮でも好いが、太いのは骨抜きにして柳川鍋をして食ふから、足下、鰌を裂くことを研究して見ろ」

と池田に命ぜられた。池田もこれには大に當惑した。それから苦辛して指を切つたり、傷付いたりして、熱心に研究したお蔭で、上手に出來るようになり、客が見えたから裂け、一杯やるから柳川をと、毎日の要求で、漸く上手になつた頃、肝腎の鰌が無くなつた。この種切れで、池田もヤレ〳〵一安心と思つたら、又こゝへ厄介ものが來た。

今度は狩獵期に入つたので、懇意な銃獵家連から雉子、山鳥、兎、鳩と種々な獲物を、毎日送り越されるので、料理番も昨今は鳥料理と看板を替へさせられた。畫を描く時より使はぬ頭の持主は、休んで居る頭で、突拍子もない食物を考へては、大に料理人を困らせる。春が來れば蒲英(たんぽ)公の葉を三杯にしろ、藜(あかざ)の芽を胡麻あへにせよ。それ松の新芽を摘ん

で、茄でこぼし、醤油で煮詰て佃煮を作れ、艶蕗の莖の皮を剝いて糖味噌漬にしてくれと命ぜらるゝかと思へば、今度は方面を變へて間食物に移り、栗を焚いて夫れに餡をかけた「餅だまし」と云ふものが食ひたいから直ぐ作つてくれの、麥粉には砂糖などを入れずに別に砂糖をドロ〳〵に煮とかし、その砂糖汁を麥の上に垂らし、轉げ出た玉狀のものを、匙で掬つて食ふのだが、栃木の町で食つたことがあつて甘かつたから、それをこしらへろと云ひ、それは〳〵變手古な食物を考へ出しては、即座に作れと云ふのだから、料理番の苦勞は一通りではない。然しそれが先生唯一の慰安として、何れも努めたものである。

六十一　醉を醒してやらう

佐野の在赤見村一の澤に、須永茂兵衞と云ふ大酒家の老人がゐた。この人は、元と織物仲買商の番頭を勤めてゐたのであるが、主家が廢滅してから、この村で妻子相手に農業を營んで、極めて氣樂な生活をしてゐた。

この人が以前、繁榮してゐた時、先生がこの人の二階にゐたことがあつた關係で、至つ

て昵懇であつた。一の澤と足利とは三里半も隔つては居るが、茂兵衞さん、年に三四回は白石山房を訪ふので、その時は必ず酒氣紛々として居る。酒氣のない時は、猫の子のやうに、氣の毒なほどおとなしいが、酒氣のある時は、反對に勢ひ好く、何でも忌彈なく卷掛ける癖があつた。

或る時、正體もなく醉つ拂つて、白石山房の庭から、大聲を發してやつて來た。それでも先生は平氣で、何時もの如く會はるゝと、ろれつの廻らぬ卷舌で、

「先生、お前は華山よりも畫は上手だけれど、慢心してはイケない。君は自ら仙人だと云ふが、一體、仙人とはどんなものだか、今日はそれを聽きに來たのだ」

と、へべレケでよろめきながらも、なか〳〵の元氣だ。先生は好い加減にあしらつて、

「ムゝ、仙人のことが聽きたいか」

など笑つてをられたが、

「早くそれを聽かせてくれ……云へぬか、この馬鹿仙人！」

と、勝手に罵り騷いでゐる。あまり五月蠅いので、ツカ〳〵と立たれた先生、いきなり茂

兵衞さんの襟首をグッとつかんだかと思ふと、地團太踏んで瀉掻く奴を、そのまゝづるづると井戸端へ連れて行き、

「醉が醒めたら仙人の話をしてやる。で早く醒めるやうに少し冷してやらう」

と云ひつゝ、頭からザブ〳〵と、片手桶に七八杯も水を浴せたので、茂兵衞さん忽ち醉が醒めて、

「先生、俺は何をしたかね？」

と、目をキョロ〳〵させてゐた。

お上手も氣樂もない、思つたら直ぐやる、こゝが武士的鍛練の結果だ。何でもこの調子だから面白い。

六十二　義妹の啖呵

何を感じたか、急に山谷堀の義妹に宛て、

「話したいことがあるから至急來てくれ、その序に千住名物の鮒の雀燒を持て來るように」

との手紙で、妹は早速、雀燒を土產に、白石山房へ來た。

二階へ上つて、二言三言話をしたかと思ふうちに、何か言葉の行違ひか、急に高調子で荒々しく口論を始めた。互に激した揚句、先生は、自分から注文して持つて來て貰つた雀燒を、

「そんなものは俺の家では食ひてがないから鶯鳥にでもやらう」

と云へば、一方でも、なか〳〵承知せず

「ハァー左樣ですか、それなら鶯鳥にやりませう」

と云ひさま、二階からトン〳〵降りて、物置際の鶯鳥の追入の中へ、折のまゝ投げ入れて終つた。

それから座敷へ戻つて來て、手當り次第に巴の紋の付いた重箱や、蒔繪のある物を、ドン〳〵外へ放り出し、ツヽケンドンに、

「へ、あなたは立派な先生ですよ、へン帝室技藝員になつたからとて、天狗も程がある。この品々は皆元は松井家の物である。松井家の定紋の付いたものは、今では目觸りでせうから皆私が毀して終ひます。能う考へて御覽なさい、畵の修行は誰のお陰で出來たの

です、姉さんや格太郎をつれて、松井家に來てゐたことはないんですか、どの位、死んだ親父の世話になつたか、それを忘れて終つて、勝手なことをお云ひでないよ」

と、啖呵を切つての大暴れで、殆んど手が付けられない。

この義妹と云ふのは名をお金と云ひ、亡菊夫人の妹で夫人死後、短日月ではあつたが、逆緣の夫婦暮しまでした仲であり、殊にこの婦人は十四の時に自ら眉毛を剃り落し、御殿奉公に出で、それから鍋島家、細川家と御殿勤めを續け、良人も持たず、女やもめで通した程の女で、男優りの氣性を備へて居る處から、何かに付けてもお金や〳〵と、相談相手にしてゐたのである。先生が東京へ出られた時には、大抵この家に厄介になつた位で大へん親しく、お金の方でも義兄を慕つて、月に二度位づゝ訪ねて來たものだ。

それ位の中で、どう行違つたのかあまりのことに先生も、呆氣に取られてゐたが、俄に出直つて

「お金や、俺が惡るかつた。まアそんなに怒るな、俺は決して松井家のことを忘れてはゐないよ。毎朝、起きて觀音樣を拜んでも、第一に松井家の無事繁榮を祈つてをる」

と、下に出ておとなしく陳謝せられたので、お金さんも漸く納まり、我を折つて開き直り互に二階へ上つて愉快に語り、二晩三晩宿つて行かれた。

このお金さんについては、面白い話も隨分あるやうだ。池田が白石山房へ來るについてもいろ〳〵心配したのだ。池田に取つては大切な大叔母であるから又格別である。

先生と池田との間に、何かお金さんのことを話し合つてゐたが、二人の間に意見の相違があつて池田も容易に服さなかつた。ガン〳〵遣つてゐる間に、先生は大に立腹され、揚句の果に、水も滴る三尺の秋水を引拔き、

「切り捨てゝ終ふから、そこに坐れ」

と、恐ろしい見幕、池田もこれには一寸驚いたが、今さら逃げも隱れも出來ぬので、落つき拂つてそこに坐つた。すると先生は、刀を引提げて後に廻つて、

「さア覺悟は好いか……何か遺言は無いか。」

と云はれるので、

「別に遺言は無い。」

と答へた。それを聽くや、先生は更に威武高になつて、
「馬鹿、貴樣も武門の末ではないか、遺言の無いことはあるまい、唯犬死をする奴があるか」
と云はれるから、池田はます〳〵落ついて、
「左樣、大叔父であり、師匠であり、且つ又義父と慕ふあなたに切らるゝことは、實に本望の至りで、一書生の身として寧ろ名譽だと思ひます。今さら何も思ひ殘すことはないどうか、あなたも笑はれぬやうに見事に切つて見て下さい。」
と云ふや、靜に聽いてをられた先生は、また新らしい疊の上に、惜氣もなく、その刀をズブリと突き立て、
「貴樣の膽を試めして見たのだ」
と、逃げ口上を云ひ出した。
「そうですか」
とおとなしく引下るやうな池田でもない。殊に池田もこゝに坐るまでには、全く殺されるものと覺悟して坐つたのだ。人を弄ぶも程があると思つたから、少々ムッとしたから尙更承知しない。

「事、苟も叔母の身の上のことである、引いては私が此方へ來る時の約束にも拘る事であるから、どうしても承知が出來ない。又あなたが武士として、一旦、鞘を拂つた刀を、そのまゝ疊に刺して、事の濟む位なら、何故に拔いたのです」
と、捨鉢氣味で迫つてをると、先生も面倒だと思はれたのだらう。先刻とは打つて變つておとなしく折れて、急に言葉を柔げて、
「俺の思ひ違ひであつた。これはお金には内々でゐてくれ、貴樣には何でも望みの畵を描いてやるから」
と、謝まられて前言を取消された。
何を好んで先生が、人殺しをされるものか、刀を拔くのは先生の掛引きで、池田も已に二三回はそんなこともあつたので、もう慣れて終つて、
「殺すものか」

と承知して、却て先生を脅かすのである。段々慣れると横着になる。

六十三　日月星の定紋

草雲先生の定紋は、一寸、世間に類のないものであつて、見當の付きかねるものであるが、あれは日月星の三光を型取つたもので、丸形の外輪の白が月で、その中の黑丸が日、日の左方に小い黑點が星である。先生は自ら日月星と命名してをられた。

これを定紋にした動機は、根岸にゐた頃、大さう強さうな武士が着て居る鎧の胴に、その紋が書いてあつたので、

「これは面白い、何だ」

と問ふと、その武者が、

「これは日月星を型取つたものだ」

と答へた。と思ふと、夢がパッと覺めた。枕上には燈火孳々と燃えて、その武士もゐない

「あゝこれは夢であつたか」と驚いたが、さても不思議、確に日月星の紋所が、はッきり

目に殘り、その聲が尙ほ耳に殘つてゐる。これは、天我をしてこれを感得せしめたのである。

と、豁然として悟る所あり、自ら喜んでこれを用ふることになつた。

六十四　美術界の感慨

先生はよく次の樣なことを述懷された。——

「繪かき文盲、儒者貧乏」と昔は云つたものだが、繪かき、決して文盲ばかりでない、別して南畫家は氣韻を尊ぶので、學問修養を第一とするので學問はあつた。が、貧乏なことは、決して儒者にも負けなかつた。

然るに文明の世の有難さ、今日では畫家も昔ほど貧乏に困しむ者が少くなつた。と云ふのは、時代の推移と共に美術通信機關が整ひ、趣味の普及向上に努める其結果、全國の津津浦々にまで響いて行く、同時に畫家の名も自然に知れて行くのである。

その上、展覽會が盛んに催されて、そこに出品して、行賞を授けられるから、人氣は頓

に沸騰して、一時に流行兒となつて、わい〳〵と騒ぐやうになる。と云ふやうな調子で、自然に美術思想が涵養されて、一般に繪畫に對する眼も肥え、知識も出來て來た、昔とは大分違つて來て、作家を國家が待遇して、世に出るのが昔の樣ではなく、大へん樂になつて來た、俺が青年時代には、世間は繪などに對して全く盲目であつたから、繪かきの生活は骨が折れた。

然し自分が非常に努力を以て、苦るしみつゝ研究して始めて漸く大家になれる昔と、今日のやうに樂々出世の出來るのと、どッちが實際、本人のためになるかと云へば、俄に判斷が出來ない。併し俺が思ふには、苦しみつゝ、やッとのことで大家になつた人達が死に絶えた後に、それとは雲泥の相違ある樂々と出世の出來た大家ばかりになつた美術界に、何か一つの不足が湧きはせぬかと、後世を怪しむのである」――と、

然るにこの頃、或る雜誌に、九代目團十郎の述懷として出てゐた話に、

――「自分や寺島(五代目菊五郎)が子供時代には、芝居は三座より無かつた。それも芝居町で通つた淺草猿若町に限られ、而も各座附屬の役者は、その座以外には出ることは許さ

れないで、三丁目の役者は、三丁目で生涯を送り、二丁目の俳優は、市村座の飼殺し。一丁目の役者は、一丁目で一生を終ると云ふ窮屈な非文明的の規約があるので、苦しみながらも泣きながらも、座附の名優や他參にいぢめられつゝ、そこで暮すより外に道がないので

「何くそ」

と自然に勉强するので、次第に腕が研けたものだ。處が今日では、到る所に劇場が出來て役者は引張り凧であるから、分不相應な大役も出來、給金も案外に身入があり、待遇と生活と二つながら、昔のそれよりは餘程らくであるから、早くも小功に安んずるので、昔のやうな名優は、自分や五代目、その他の古參がなくなつた後の劇界には、自ら名優が出ないだらうと、私に悲觀して居る。」――

劇界と美術界の相違はあるが、共に斯界のために感慨無量なるは同じで、共に一方の大家たるだけに、その見る所が正に同じである。若し團十郎をして美術界を評せしめたなら、果してどう云ふだらう。これこそ正に草雲先生の知己と云ふべきである。

この九代目團十郎は、赤ん平と云ふまだ子役時代、先生は山谷堀の頃に、僅ではあつた

が、畫を習ひに來たことがあつた。今の吉右衞門の親父時藏も、子供時分に矢張り門人であつた。それから九藏も入門したが、大きくなつてからは何れも來なくなつた。唯時藏だけは、前橋へ來た時も、宇都宮へかゝつた時も、足利まで訪ねて行つた。

「手筋は團十郎だけは優れてゐた」

と、能く先生も話されてゐた。

六十五　勤王と俠客

山靈にして人と傑、上州の氣骨を代表せるもの忠義と情義の二道がある。前者は新田左中將義貞、高山彦九郎正元、其他幾多の勤王義烈士にして、後者は國定忠治、大前田英五郎等の義俠勇猛の輩である。

草雲先生は壯時上州に遊び忠治に遇はれた、其所感を問ふと

「忠治は面方にして色白く、氣勢凜乎として寒むからざるも、人を慄せしむるところあり、眞に一個の俠漢であつた」

と、更に語を續けられて

「忠治が仁俠を以て大衆を慈惠したことは、世間で能く知るところであるが、世人のあまり氣の付かざるところに、忠治の人となりがよく知られる、一般良民に對しても頗る謙抑謹愼で、從て言貌穩和、傲慢の色が秋毫の末ほども見えない」と

英雄女の如しと云ふが、眞の英雄の平素は靜穩のところがあるかもしれぬ、更に談語して

「平生の生活は非常に質素で、常に綿服より纏つたことなく、草鞋を穿て大概のところは乘物を用ひず步行するのである、途に耕耨に精勵するものがあれば一遍の挨拶をなし其勞を慰め、村で兒童に逢へば錢を與へ、疾病に惱むもの、死去するものあるを聞けば救恤を厚ふし、土地の富豪の子弟にて賭戲をなすものには諄々訓誨して遂に之れを止めしめ、盜賊の近隣を脅すものあれば徒下を率ゐて擊ち、或は懇々訓諭して善良に導いた。

關東の大旱魃にて途に餓死する多くの人に、衣服什器傳來の名刀まで剩すことなく賣拂て米數百俵を購ひ、一人に米三升と錢二百文を與へた。又、村內の開墾癈溝を整理して

灌漑の便を計つた。幾百の徒には規律嚴正で斷じて贅澤を許さぬ、喫飯の際は胡座は勿論膝を立ることも一叱するとともに、愛撫すること恰も子の如くであつた、故に乾兒淺次が親分のために實の叔父夫婦勘助を斬つたので有名な赤城の首實驗は之れだ、決して偶然でない。以來忠治を見て大衆は篤志に感激し鞅掌して、まるで慈母を慕ふが如くであつた、忠治の捕縛されたことが傳はると鄕里國定村を始め其他十五ケ村の農民數百名越後、常陸、下野あたりより忠治の助命を請ふ願書を官に捧ぐるものが枚擧に遑なかつた。忠治は累を他人に及ぼさんことを慮り、總てを一身に引請け、敢て辯解をしなかつた」と、先生は云つて居られた。

自分を嚴にし他人を緩にするのに篤行、博徒にしてこのことあるは頭底想像だに及ばぬところである、實に一世の快男子と云ふべきである。

賭魁忠治は單なる博徒でなく一種の人傑であるから、從て志高く、水戸浪士武田耕雲齋に軍資を援助したことがあると、今尙口碑に傳へられて居る。

先生の豪傑と忠治の奇傑とが其後交り、年有りと云ふが、剛に嘯虎躍龍の感なき能ずで

ある。我友豐國覺堂君は、

「上毛及上毛人」社の社長で大正十二年一月發行第六十九號に

「國定忠治の頭蓋骨と養壽寺の貞然法印」

と題する記事を綴つてゐるが自分は之を讀過、拍案の欣快に接したことがある。その大要は

「群馬縣佐波郡東村大字國定、天臺宗養壽寺の棟木より、近年發見せしと云ふ、忠治の頭蓋骨を見るに、その骨の入れてある函は縱八寸横一尺二寸徑六寸程の古箱を利用したもので、本尊の前の經机の上に恭しく安置され、徐ろに蓋を取れば古袈裟の切に包まれ、永年天井の棟木に括り付けてあつた爲に大分煤けて居る、其頭骨は下顎なく僅に上顎の左方に一本の奥齒を見る、(覺堂君はこれら醫學上の腦力を持ぬので、男女の骨相時代新古等識別することの出來ぬを遺憾とする)

云つて居る。現住より五代前の貞然と云ふ住僧が、この頭骨の函に一札を書き殘し置きたるを讀めば

書置申一札之事

此度大戸御所刑場固の　　より竊に貰受埋葬致置き候得共公儀を恐れ押隱し不相知體に成置候得共御探索方嚴敷且つ舍弟友藏を取押へ僉儀に及ぶ可く、隱密晝夜立廻り穿鑿致され候爲め市之亟親子まで疑を請け友藏を圍ひ置き候樣八州手先之者共利潤に昏み事を兩端に量り罪禍難澁に及ぶ可く其儘にも差置候はゞ可及露顯如何樣にも難捨置玆に再攝し秘密に納置く者也御推察之儀奉願上候向後幸に見當り候はゞ一遍の回向を給り度依而此段相願置候以上

長岡院法譽花樂居士

嘉永三年戊年十二月廿一日

養壽寺法印樣

師僧養壽寺貞然

草雲先生羽食簡堂の稿せし傳記を謄寫し、忠治の肖像を描き、之を剞劂に附し上梓して世に公にせんと計畫されしも、故あつて半途にして中止された。この肖像は足利町の荻野萬太郎氏の珍襲するところ、予も亦たこれを借寫して藏して居る。

六十六　臨終と記念の一刀

先生の病漸く革り、命、旦夕に迫つたので、方々の親戚からも驅け付け、門人知友も即刻馳せ參じ、東京からは松井家の關係なる池田の父なども行つて、枕邊に附添つて看護に努めて居る時、不圖、思ひ出したやうに、先生が、

「孫太や、俺もこん度はモウ助からぬ。死んで終へば、澤山もない財產は、どうせ散逸して終うのだから、目ぼしいものは何でも持つて行くが好い。その中でも、今記念として遺る品がある」

と云ひつゝ、二階の三角戸棚から鬱金の木綿袋に入れた刀を持つて來させられた。

この刀をなつかしさうに撫でながら、

「これは俺がお菊(亡妻)と夫婦になつた時、松井家に傳はる刀の一口であるが、記念のため今改めて其方に取らせるとて、お菊の父から貰つたもので、その後俺の差料として、長らく手挾んでゐて、和泉橋で辻斬の浪人を切つた時も、この刀で俺が第一刀を浴せた

こともあるが、今俺が死んで終へば、どうせ他人の手に渡つて、滅茶〳〵になつて終ふから、記念としてお前に與る、與ると云ふよりはお前に預けて置けば、松井家傳來の一刀が、復た松井家へ戻ることになるのだ、刀は左程、名刀ではないが松井家のために由緒深いものである、かた〳〵記念として相應はしい品である」

とて、池田の父が貰ひ受けた。

これは茶村の手に因て白鞘作に改造されてあつた。先生の遺品として池田が持て居れば記念としてこれほど思ひ出の深いものはあるまい。

先生臨終の涅槃に際し、予も亦た愼重看護に當て、寸時も褥床を離るゝことがなかつた。氣息は次第に奄々となつて來たが、一度口を開けば言語明瞭で殆ど平素と異りがないのである、其時

「翠雲はそこに居らぬか」

と云はれた。

「こゝに居ます」

と答ふれば

一言金玉とも云ふべき最後の敎誡、まるで骨を刺すやうに

「南畵本來の面目を描破する所は、心眼に因る大自然の大觀大定に外ならず、徒に時流に阿ねる塗沫粉飾の技と同一視する莫かれ」

と言終て、無念無想泊然として示寂された、一座潸然涕泣を禁ずることが出來なかつた、時維明治三十一年九月一日、齡正に八十四、年は異なれども大正十二年九月一日天柱將に摧けんとする大震災と日を同じうして希世の大偉人を喪つたのである。天公無情嗚呼悲哉

元來、先生は、武士の家柄として、武士の魂として、刀劍を非常に愛翫して、大分持つてをられた。折々は一人で刀を拔いては、にツこりされた。丁度これが先生の精神的鍛錬であり、修養であつた。それは丁度吉田松蔭先生が、時々、刀を拔いては精神修養してをられたのと同じである。それ位に好きで、自ら磨いたり、油雜巾で拭いたりして樂しんで居られた。毎年一回づゝ例の愛嬌者の茶村が手入をするのであるが、柄の卷直しや鞘の修繕まで、なか〳〵器用にやる。それも茶村は、足利藩主戸田家の柄卷御用を勤めたと云ふ

から、それは當然である。

ある夏、茶村が刀の手入をしてをると、先刻から側で見て居られた先生、よせば好いのに

「俺が一つ砥いで見よう」

と、刀を持つて臺所へ行き、砥石に掛けて一生懸命に砥いで居られると、無遠慮な蚊が、ブンと飛んで來たかと思ふと、先生の臀を、痛いと云ふほどチクリと刺した。流石の先生も堪へ切れず、左の手で、その蚊を敲かうと、臀の方へ手を廻さうとされた刹那、その手の平が、刀の切尖に觸れたので、失策つたと云ふ間もあらばこそ、血がたら〳〵と流れてあたりは物凄くも鮮血淋漓たるものであつた。而もその傷かち白い肉が喰み出した。豪氣な先生は、それにもめげず、傍にあつた小柄の尖で、その肉をもぎ取つて終はれた。隨分、強氣なのに一同がアッと驚いた。

田崎草雲先生の生涯（終）

昭和五年拾月廿三日印刷
昭和五年拾月廿五日發行

（田崎草雲先生の生涯）

定價金貳圓

著作權所有

著者　小室翠雲
發行者　東京市麹町區中六番町四〇番地　宮崎政近
印刷者　東京市麹町區有樂町一丁目一四番地　妹尾春太郎
印刷所　東京市麹町區有樂町一丁目一四番地　大参社

發行所　東京市麹町區中六番町四十番地　電話九段六二〇番　日本南畫院

578
350

5年12月9日 647

調査濟

中央研究院
圖書館藏書